

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先：
東京都品川区北品川5-8-15-1403 五島方 400円

特集・暮らしの中のアジア

■日本からアジアへ

— 輸出される有害・不要商品 —

味の素・化粧品・粉ミルク・家族計画と避妊薬

■アジアから日本へ

— 奪い尽くさんばかりに輸入 —

魚・えび・バナナ・紙

■食糧問題と私たち

■多国籍企業批判する第三世界の消費者運動

■韓国政治犯の妻たちを訪ねて



No.11

1981.12

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

■資源をアジアから奪い尽くすな!!

日々の暮らしがアジアとどんなに深くつながっているか、考えたことがあるだろうか。米物屋の店先に一年中並んでいるバナナ。大部分がフィリピンから来ているという。バナナは、近海をはじめ、世界中の海でとれるえびを、日本に持ってくるようになったからだ。また、惜しくも捨てられている紙、そして石油も、LPGも、銅や鉄鉱石も、資源のない日本は、何もかも輸入している。モノを作っている。農産物から、水産、森林、鉱物資源まで、私たちの衣食住は、アジアをはじめ、南の国々から、奪い尽くさんばかりのいきおいで輸入してきた原料に頼っているのである。

しかし、こうして、アジアから持ってきた原料や一次産品を使って日本の巨大な生産力で作る製品は、国内ではどんなにせいたくにも消費しきれない。そこで、資源輸入に使った外貨を取りもどすのに、日本からアジアへさまざまな製品を売り込んでいる。バンコクでも、台北でも、日本の化粧品がデパートに並んでいる。また、味の素はどんなジャンглの奥の雑貨屋でも売られているのに驚く。スリランカでは一日一食国民が多いのに、メイドインジャパンのラジカセでポップミュージックに聴き入るというように、アジアのどの国でも、日本製品と一緒に、ゆがんだ消費生活が持ち込まれている。なくてもすむ品物を売りつけて、ただでさえ貧しい人々のふところを一層貧しくし、心理的欲求不満をつのらせているのだ。

粉ミルクを第三世界に売り込んで、母乳から人工栄養に切りかえさせ、水道の水もなく、湯を沸かすにもわざわざたきぎをとりになければならないような地域で、人工栄養の赤ちゃんが下痢し、栄養不良になって死んでいく。粉ミルク自身はたとえ毒物でなくても、環境によっては赤ちゃんを殺す凶器に変わるのだ。それに、有害とわかっている毒物そのものまで隠面もなく韓国や東南アジアへ輸出している。日本国内では禁止された農薬や薬品を、環境消費者保護のシステムが整っておらず、国民が強力な反対運動に立ち上がることを抑えられているのをよいことに、第三世界に売りつけている。

このような日本をはじめとする先進工業国の多国籍企業は、第三世界にインフラが移りつつある。OCUの会長のポストに、七八年初の非欧米人が就任したのもその表われといえる。マレーシアのペナン消費者協会のアンワー・ファザール会長は、「西のネーダー、東のファザール」と呼ばれるくらい戦闘的なリーダーだ。昨年(80年)来日したとき、日本の消費者運動に、「もっと貧しい国々に目を向けてほしい」と熱く訴えかけた。この若くて精力的なマレーシア人が、世界の消費者運動のリーダーとなって、第三世界の立場を強く打ち出した背景には、彼が、一九七〇年に創設したペナン消費者協会(CAP)の地道な運動の積み重ねがあった。開発途上国の消費者団体が、政府の息のかかった御用団体的なものが多かった時代に、民間

世界の消費者運動の流れは、二、三数年来、先進国主導型から、第三世界にインフラが移りつつある。OCUの会長のポストに、七八年初の非欧米人が就任したのもその表われといえる。マレーシアのペナン消費者協会のアンワー・ファザール会長は、「西のネーダー、東のファザール」と呼ばれるくらい戦闘的なリーダーだ。昨年(80年)来日したとき、日本の消費者運動に、「もっと貧しい国々に目を向けてほしい」と熱く訴えかけた。この若くて精力的なマレーシア人が、世界の消費者運動のリーダーとなって、第三世界の立場を強く打ち出した背景には、彼が、一九七〇年に創設したペナン消費者協会(CAP)の地道な運動の積み重ねがあった。開発途上国の消費者団体が、政府の息のかかった御用団体的なものが多かった時代に、民間

■有害なものをアジアに持ち込むな!!

篤志家の財政的バックアップで発足したCAPは、東南アジアでは初めての自主独立の消費者団体であった。その活動範囲は消費者運動という日本で考えられている狭いワケを越えて、公害反対運動から労働衛生職業病闘争まで、広い意味での環境問題全般に取り組み、先進国の多国籍企業に対して鋭い告発を続けてきた。

多国籍企業のテコ入れで、急速に工業化が進み、消費文化が拡がりつつあるため、消費者、環境運動が活発になってきているのは、マレーシアに限らない。フィリピンの消費者運動の推進役は、ジュリー・アマルゴというファイトのある女性で、国際会議での彼女の多国籍企業批判の舌鋒の鋭さには圧倒される。「多国籍企業が巨利をむさぼり、第三世界の消費者を苦しめている」と非難するのだ。彼女が発行している消費者運動の機関誌「アン・マミミ」は、たとえば、フィリピンの製菓業が米国企業に握られている実態を調べあげて告発するなど、毎号のように、多国籍企業がフィリピン経済をいかにほしいままに牛耳っているかを暴露している。

韓国では、鄭光護女史を会長に、韓国消費者連盟が、きびしい政治体制の下で許される範囲で、精一杯活動している。台湾でも、最近ようやく、台湾大学の研究者などを中心に消費者グループが生まれた。いずれの国でも、きびしい独裁政権下で芽生えた運動だが、それは、あくまで氷山の一角であり、その背後には、肥え太る一方の多国籍企業の支配のもとで、貧しさに喘ぐ民衆の「少しでも暮らしを楽に」という切実な要求が渦巻いているのである。

ファザール・OCU会長は、第三世界で着実に拡がりつつある消費者運動について「今日、消費者問題というのは、良心に関わる問題、社会正義に関わる問題、人権に関わる問題、生存に関わる問題としてとらえられる」と述べているが、そのような立場から、先進国の人々にも、共に、現在の不正な経済のあり方を根本から問い直すことを求めている。

それは、一人一人のライフスタイル(暮らし方、生き方)を変えていこうという呼びかけでもある。とくに、世界で七億五千万人もの人々が飢えに苦しんでいる。その一方で、食物の八割はゴミとして捨ててゴミ公害を起したり、肥満児学級や美容教室大はやりといった日本など豊かな先進国に住む私たち。この地球規模の富の不公平という南北問題を解決し、貧しい途上国の人々が飢えから解放されるためには、私たち自身の生活のあり方を変える以外ないのではない。

私たちは、多国籍企業が第三世界から収奪してくる利潤のおこぼれにあずかっているのであり、「有害なものをアジアに持ち込むな」「資源をアジアから奪い尽くすな」という叫びに耳傾けて、私たちの浪費的な暮らしを具体的にどう変えていくのかを、話し合いたいものである。女としての生き方を問い直すことは、自然と調和したエコロジカルな生活を実践することであり、そこから、第三世界の人々とつながれるのではない。

一九八一年 十二月十六日

くらしのなかのアジア

日本からアジアへ

化学調味料はアジアの 飢えを再生産する

明石由美

日本の「専売商品」グルタミン酸ナトリウム（グルソー）がアジアの食生活をゆがめ、人々の飢えを助長している。

最大の国際メーカー味の素KKは世界のグルソー需要三〇万トン（年間）中の一二万トンを生産。このうちの五・五万トンを今や発展途上国の海外工場（東南アジア四万トン強、中南米一万トン強）がこなしている。味の素KKの東南アジア進出は六〇年代に、中南米進出は七〇年代に集中的に行われた。従って、これらの地域ではわずから十年から二十年の間に世界グルソー市場の約二〇％を生産消費するようになった、といえる。

こうした短期集中的な進出の運転資金となったのが、六〇年に開発された発酵製法と、六三年の石油合成製法だ。発酵製法の登場によって生産コストはそれまでの十分の一に、さらに石油合成製法でキロ単価二十五円にまで下がった。これにともない、国内生産は急増。六〇年以降毎年約一万吨の増産を重ね、七一年の一〇万トンまでのぼりつめた。低

コスト量産体制から上がる利潤で味の素KKの海外投資も急激な上昇カーブを描く。その投融資残高は、五〇年半ばから六〇年半ばにかけて二・三億円だったが、七〇年前半で三十億円にはね上がり、以降、七五年百億円、七九年二百億円。この時期に途上国戦略の第一弾として東南アジア進出が行われ、六一年タイ、六二年フィリピン、六五年マレーシア、七〇年インドネシア、七三年シンガポール、七九年香港の各製販工場が操業を開始した。

一方で「グルソー有害説」が米国と日本で火をふく。日本ではグルソーの毒性ばかりでなく、石油合成製法の味の素が発ガン性物質三・四ペンツピレンを含んでいると指摘されたため、大騒ぎになった。全米科学アカデミー、日本の厚生省などが調査した結果、評価に若干の違いはあるものの、総合的には「有害とはいえないが、多量に使うのは控えるべきだ」という判断が定着する。このため先進諸国のグルソー需要はバツタリと止まった。味の素KKは

七三年、石油合成製法をついに全面停止。石油味の素は全生産量の五分の一を占めていたため、その損害額は九億円ともいわれた。しかし同じ時期に、アジア工場からの利潤が上がり始めていたのである。

調味料飢餓工場

グルソーが東南アジアに進出して行く足取りはすさまじいの一語に尽きる。たとえば、最大規模のタイ工場では、当初の生産はわずか六〇〇トンだったが、二十年間で十二回の小刻み増設をくり返し、八〇年には二十五倍の一万五千トンに達した。

急成長の最大の秘けつは、そこが企業の営利活動にとってもっとも都合がよい場所だったためである。第一に、原料のタピオカでんぷんなどがタタ同然の価格で全面的に現地調達できる。これで、グルソーの利潤が売り上げ高に占める割合は本社の一・七％を大きく上回る六・三％に。また、アジア諸国には食品添加物を規制する法的措置がないため、その気になりさえすれば企業側はいくらでも売

りつけることができる。第三に、経済発展を至上課題とする現地政府は外国資本の保護者だ。十年間で一万トンの生産レベルに達したインドネシア味の素の合併先は、国営のソーダ会社。製造原料のソーダ確保が容易になったばかりでなく、政府は「外資法」などに基き四年間、法人税、配当税、全ブランドの輸入税などを免除する特典を与えた。

「野放し」状態の中で、資本力にものをいさせた広告・販売力はそのまま製品の浸透力になる。味の素本社を訪ねたとき、日本で行なっている使用量の適性表示を何故アジアではしないのかとたずねると、「今のところそれで問題がないので……」と口ごもりがちだった広報室も、広告の話になると明快に「総売り上げの三・四％を広告宣伝費に投入。キャンペーン期間中はTV、ラジオで一日三十〜五十回ぐらいCMを流します」。

販売も同様に物量作戦。タイの店舗数は直販店一千軒、小売店五万軒。社員はジャンглの末端店までおわんのマークのついた自動車を出かけて行き、製品をおろし、代金の回収までする。長い出張の場合三週間も本社に戻れない強行軍の販売システムが全土に行き渡っている。

圧倒的な企業優位体制の中で、アジアの人々はグルソーを異常な方法



タイで売られている味の素

で多用するようになった。そのことを指摘するのは、アジア諸国の現状に通じた日本の女性たちだ。「タイ人はメン類が好きで、路上の屋台が多いのですが、ダシ一人前にティースプーン山盛り一杯の味の素を放り込むのでギョツとしました。仕出し店なども同じ使い方です」とバンコクの大学で教えていたMさんも「野菜ピンに滞在していたMさんも「野菜

のため、ビーフン、スープといった庶民の常食に、主婦は三グラム袋の味の素を全部バツと入れてしまう。おかずがない時は直接ご飯やバター付きパンにアジシオをふりかけて食べます。それが向こうの使い方なんです」という。「インドネシアでは夕食時になると街角にグルソーのおいがたち込めるほど。簡易食堂に入ればどこも皆一律に味の素の味」と今春インドネシアを回ってきたIさん。

食事の貧困と味の素

Iさんがインドネシア人約五十人にグルソーを大量に使う理由を聞いたところ、グルソーに対する正確な商品知識を持ち合わせている人は一人もおらず、「そうしないとおいしくないから。ふればふるほど味がよくなる」と広告をうのみにした返事が多かったという。

大量の化学調味料によってアジアの食生活に生じたゆがみをMさんは次のように話した。「フィリピンでは一般に貧しいため食料品はほとんどその日買い。主婦の買い物カゴの中には本当にささやかな米と野菜。その中に必ずといってよいほど味の素の小袋が入っています。味の素は、食事の素材の貧しさをこまかく方向で使われているのでは」——東南アジア諸国の平均所得は一カ月で大体一万五千円ぐらい。失業率が高く、子どもで、栄養失調による乳幼児死亡率は日本の六〜七倍にも達する。

こうした環境下では、一袋七・五円（三グラム袋）の調味料が、食事の貧しさをこまかく方向で大量に使われることによって、もともとの食卓の貧困を一層拡大する悪循環を生み出す。その意味で化学調味料はアジアの飢えを再生産しているといえる。

一方で、海外従業員八千四百人の

多くは臨時工と一年契約の正社員とに分断され、長くつとめても職長クラスまでしか昇進できず、昼夜交替制のきつい労働が続く。工場の汚濁排水が地元の川に流入して、数十万トンの魚が大量に死んで、二十万人都市が三十分間に渡って断水となっても、工場側は汚濁排水が流れ出したら警報がなるような装置を付けるだけの対策しかとらなかった。

こうして海外子会社が稼いだ利潤は本社に流れ込み、五十五年度は、海外から入った利子、配当収入が対前年度比で五二・四％増の四十四億円。連結決算利益で四分の一を占めた。本社は「侵略」の未来図を次のように示す。「年内にフィリピン、タイ、インドネシア、ブラジル工場の生産能力を二〇％レベルアップ。来年中にマレーシア、ペルーも増設します。これで今年中に海外の生産量は国内を上回る六万トンになります。アジア、中南米の次は、中東と北部アフリカで……」

何故、日々の食事に事欠く人々が、栄養価ゼロの化学食品を、健康への影響が心配されるほど大量に買わされねばならないのか。途上国に飢えをもたらしているのは一体誰なのか——私たちは自らの暮らしのあり方を問い直しながら、アジアへの連帯の方法を考え出そうとしている。

赤ちゃんを殺す粉ミルク

★国際綱領をらせるよう粉ミルク会社の監視を！
★母乳育児の権利と働く権利の両方を！

ボトル・ベビー、つまり、ほ乳ビンで育てられる第三世界の赤ん坊が死んでゆく、というショッキングな話を耳にしたのは二、三年前のことだ。米国の市民団体から「ネッスル・ポイコット」のチラシを送ってきたので何ごとかと思ったら、開発途上国に粉ミルクを売り込んで、赤ん坊を殺している世界一、二の総合食品企業ネッスル製品の不買運動だった。日本とは直接には関係なさそうとタカをくくっていたら、昨年、マレーシアの消費者団体の機関紙の粉ミルク問題特集で、日本のブランドもやり玉にあげられているではないか。

秋になると、WHO（世界保健機関）の母子衛生課長スチュア・博士（スエーデン人）がひよこり来日、WHOで、粉ミルクの国際基準を作ることになったが、日本政府は反対なので困っている、という話だった。そして、このとき、「育児用粉ミルク問題を考える会」というクリスチャンを中心にした小さなグループが細々と活動していることも知った。粉ミルク禍が初めて明るみに出たのは、一九七四年イギリスの市民団

松井 やより

死んでしまう人工栄養児も続出したのである。そのような痛ましい赤ん坊は、第三世界で年間一千万人を越えるともいわれる。まさに「商業的栄養失調」とも名づけられるように、多国籍企業の利潤追求が幼い命を奪ったのである。

ベビーキラー裁判

第三世界で販売される粉ミルクの半分のシェアをおさえるネッスル社（スイスに本社がある多国籍食品企業）の責任がとくに重いと、西ドイツの市民団体が「ベビー・キラー」を翻訳して「ネッスルは赤ん坊殺しだ」という題で出版した。ところがネッスル社がこのタイトルは名誉棄損だと市民団体を訴えたことから、かえって、この問題が広く報道されることになった。二年後の七六年に出た判決は「題名は名誉棄損に当る」と原告の主張を認めたものの、乳幼児食品企業の社会的責任をきびしく追求し、実質的にはネッスル社が断罪されたようなものだった。

この裁判をきっかけに粉ミルク禍告発の市民運動がアメリカに拡がり、

各地の消費者、宗教家、市民、女性などのグループがこの問題に取り組んだ。ネッスルだけでなく、米国系三大大手粉ミルクメーカー（プリストル・メイヤー、ワイス、アボット・ロス）の第三世界への売り込みについても抗議すると共に、七七年からは、ネッスル・ポイコット・キャンペーンを全米で展開した。こうした世論を背景に、エドワード・ケネディ上院議員が七八年公聴会を開いて、事態を明るみに出し、WHOに対して「国際綱領を作って規制するように」と勧告した。

アフリカや中南米やアジアの村々で、ほ乳ビンを与えて、やせ衰えてはかない生を終えた赤ん坊の声をききながら、WHOは七九年秋、ジュネーブに、政府、業界、専門家、市民運動の四者を招いて会議を開き、参加者たちは母乳推進と粉ミルク販売の国際綱領づくりをWHOに求めたのであった。年が明けた八〇年春のWHO総会で、国際綱領を作る方針が決まり、今年八一年五月の総会で、基準が、各国政府への「勧告」として正式に採択された。各国に法的強制力のある「規則」としてではなかったが、賛成百十八カ国、反対一カ国（米国）、棄権三カ国（日本、韓国、バングラデシュ）という圧倒的多数での決



%にもどるなどそれなりの効果は上った。WHOのスターキー博士も「欧米に比べれば、日本はよくやっている」と評価していた。

日本メーカーの進出

しかし、日本の三大メーカーは、海外に目をつけた。出生率が下がったこともあって国内での粉ミルク消費量は一九六八年の九万二千トンをピークに年々減り続け、昨年は六万トンを切り三分の二以下に減った。ところが、輸出は逆にふえて、一割にも満たなかったのが、昨年は四分の一近くを占めるまでになった。輸出先は当然アジアが中心だが、中南米や中近東まで、メイド・イン・ジャパンの粉ミルクが売り込まれている。それがわかったのは、粉ミルクキヤンペーン市民運動が世界中に張りめぐらしている監視網に引っかかったためだ。たとえば雪印が昨年二月マレーシアの新聞に出した「猛烈販売促進チームと共に働くマザー・クラフト・ナース（妊産婦指導員）を求む」という募集広告や、明治が昨年九月、台湾の女性雑誌に載せた「かわいい赤ちゃんのために限りなく母乳に近い明治粉ミルクを選ぼう」となどの全ページ広告などがやり玉に上がっている。また、森永が一昨年二月バングラデシュの新聞に出た「母

乳を買うお母さんナガを買おう」という広告が問題になり、イギリスの市民団体が「ベビー・キラー」の続編として出版した「ベビー・キラー・スキヤンダル」の中にも悪い例として出ている。

日本の大手三社の海外販売高はまだ数%でネッスルなどの巨大企業に比べればシェアは小さいが、輸出を年々着実に伸ばしているのが、販売のやり方をこれから十分監視しなければならぬ。日本でダメなら途上国へ——という有害商品や不良製品の先進国から第三世界への売り込みに対して、途上国の消費者団体は激しい非難をたたきつけているのだ。粉ミルク問題は、第三世界に拡がりつつある多国籍企業批判、南北問題の一つとしてとらえる必要がある。

女性解放の視点から

もう一つは、母乳育児の問題を女性解放の立場でどう考えるかということでもある。日本でできた「育児用粉ミルク問題を考える会」が当初の女性会員を失ったのも、母乳と女性解放の関係と徹底的に討論しなかつたためという。女性解放を目ざす女性たちはいきなり「母乳で育てよ」といわれても、「それでは家に帰って子育てに専念せよ」ということかと反発したという。たしかに、現状

のまま、母乳推進を叫べば、女性たちが職場から追われかねない。

この問題は海外の女性たちの関心事でもあり、米国の粉ミルクキヤンペーンの機関誌「INFANT」にも、女性の論文なども載っている。「母乳育児は女性の社会参加の妨げになる」という考え方があがるが、実際には、第三世界では、人工栄養の方が時間も手間もかかる。たきぎを拾い、水を汲むことからしなければならず、母親はむしろ働くことがでなくなる。（先進国で）働けなくなるから母乳をやめるのだとすれば、それは社会経済制度がおかしいのだ。女性は母乳育児の権利も働く権利も両方保障されて然るべきだ。そのために、最低三カ月の産後休暇をすべての国の働く女性に与え、その後は母乳育児ができるような授乳時間と設備を整えることが望ましい」と主張、乳房をセックスイメージに結びつけて、女性が母乳育児をいやがる風潮をあおった企業の術策も攻撃している。

粉ミルク禍との闘いは、南の貧しい国々の幼い命を奪って利潤をあげている北の先進工業国の多国籍企業（日本の場合、明治、雪印、森永などの乳業会社）に対決すると同時に、あらゆる国の女性たちがわが子に母乳を与える権利と働いて自立する権利の両方をかちとることである。



侵略・化粧品

アジアの女性は ねらわれている!!

日本の女の化粧のはげしさは、世界でも飛び抜けていると言われる。「日本に帰ってきて、まず目についたのがカッチリ化粧で固めた女の人の顔、顔、顔」と語ったのは、韓国に三年暮らした女性。外からみるとあらためて、化粧文化にどっぷり浸った日本の女の姿が見えてくるのである。

シーズンごとに、これでもかと繰り返される化粧品キャンペーン。テレビのゴールデンタイムを買い占め、億単位のCM費を投じて宣伝作戦を展開する大手化粧品メーカー。あらゆるメディアを通じての化粧品情報の氾濫が、受け手の側の脳皮質に一種の刷り込み現象を起こしている。高校の卒業時には、例年の学校公認の「美容講習」が行なわれていたことを覚えている人は多いだろう。

まさにこれは「産学協同」で「女は化粧すべきもの」という意識を私達に植えつけてきたのである。その結果、日本の女は、気づいて振り返ってみたら愕然とするような莫大な金と時間の浪費を続け、その異常さにマヒ状態になってしまっている。

化粧品産業アジアへ

日本の女を征服した化粧品産業のターゲットは、海を越え、全世界の女に向けられている。資生堂、カネ

ボウなどの大手メーカーは、東南アジアを手始めに、中東、ヨーロッパ、アメリカそして最近では中国にまでその触手を伸ばしてきた。

特にここ数年、国内市場が飽和状態に達し、売り上げ伸び率が頭打ちになっていることから、各メーカーはこぞ海外に活路を求めようとしている。日本の化粧品産業にとって手近な標的であり、すでに海外進出の拠点としての基盤を固めつつあるのが、アジアの市場である。

ここに最大手メーカー資生堂の、アジアにおける進出状況をとどめてみる。

一九五七年、初めての海外進出は台湾における代理店の設立である。一九六二年、香港、六三年、韓国に代理店をつくる。七〇年には100%出資の子会社、シセイドウ・シンガポ

ナイトクリーム五五〇〇ウォン
韓国女子労働者の月給三万ウォン



ールを設立する（東南アジア全域で販売される製品は、ここ台湾の現地工場で生産されている）。タイでは一九七二年に現地資本との合弁会社（出資比率 日本49対タイ51）シセイドウ・タイランドを設立、将来の現地生産体制をめざす足がかりとして販売活動を開始する。韓国では一九七九年、国内最大手メーカーの太平洋化学工業と提携契約を結び、資生堂製品の韓国での生産を始める。パッケージに資生堂—太平洋と列記、商標も並べて売られるようになった。（写真参照）

資生堂の海外進出は、二十数カ国を対象に約一三〇の販売店を持ち、約一三〇億円の売り上げを持つに至っている（本社売上高の4%）。うち二三〇〇の販売店が東南アジアに集まっている。それも「プレステージが高い」とみなされる大丸や松坂屋、遠東、レインクロフオード、セントラルといった東南アジア各都市に進出している高級デパートを拠点として販売活動が行なわれている。

資生堂は、今後ますます海外進出に力を入れ、一九八五年には海外売り上げを本社売り上げの10%にまで高めたいとしている。海外指向は資生堂に限ったことではなく、カネボウ、ポーラ、コーセー、キスミー、ピウスなど大小とりまぜてあらゆる

メーカーが海外に出ており、その皮切りとしてアジアの国々にまず始めに入っている。

資生堂の進出の足どりを追ってみると、輸出から現地代理店の設立へ、さらに現地生産体制の確立へと段階的にくいこんでいった過程がみえる。当然のことながら、関税のかかる輸出より、もっとウマ味のある現地生産の方向に、さらに進んで行くことであろう。そこに予想される、生産現場の労働者の状況や環境汚染など、私達が監視していかなければならない問題は多いと思う。

変えられる価値観

文化人類学的な視点から、化粧の歴史などをさかのぼるなら話は別だろうが、少なくとも現在私達が日常的に「化粧」と呼んでいる一連のスタイル、行為は、ここ二、三十年の短かい間に、化粧品会社という資本によってつくりあげられてきたものである。しかもそれは、いかに多くの化粧品を女に買わせてより大きな利益を獲得するかという、資本の純粹な目的のもとにデッチあげられてきたものともいえる。この、要は金儲けのための、画一的な「美」の押しつけは、アジアにおける化粧品の宣伝に顕著にあらわれている。

——宣伝パンフレットより——

カネボウ・中国語版——男人充滿活力——アジアの男も化粧の標的！



ホワイト・ビューティ（資生堂フレッシュア）

フレッシュアは日に焼けたお肌をやさしくケアし、適度な水分を与えて自然の状態に戻す化粧品シリーズです。

フレッシュアは正常な新陳代謝を促進させ、シミ、ソバカスその他の色素沈着の除去を促します。フレッシュアの成分が効果的な治療と美容療法を行ないます。（原文は英語、タイ語、中国語）

「ホワイト・ビューティ」という言葉は象徴的である。かつて経済的に優位な欧米人の生活を憧れ羨み、その白い肌まで崇拜した日本人は、欧米目指してアクセク働き、高度経

済成長を達成した。その間、「白への憧れ」を巧妙にくすぐり、白色人種の容貌に似せる化粧法をPRして女をひきつけ、急成長を遂げて現在の地盤を築いたのが化粧品産業である。そして今度は、自らが経済的優位者の立場に立ち、東南アジアの小麦色に輝く肌を持つ女性たちに「白は美なり」と説くのである。黄色い肌の日本人がアジアの人々に「白人＝豊かで美しい」というイメージを煽り、宣伝攻勢をかけて「白は美」という固定観念をつくりあげていく。そこへ化粧品を売りこむのである。女性たちは、あたかも小麦色の肌は美しいのかの如く心理的圧迫を受け、美しくなるべく、白くする化粧品を買いよう仕向けられる。そこに起こっているのは、価値観と美意識に対する侵略行為でなくて何であろう。

搾取の構造

アジア各都市の高級デパートに並ぶ日本製化粧品は、その国の女性たちにとって、ステータスにすらなっているという。日本の若い女性がグッチやデイオールを買い、いつときの「豊かさ」を追い求めるように、彼女たちはもっと少ない賃金の中から「シセイドウ」を買うための、決して安くはない費用を捻出する。（資生堂が高級デパートに店をおき、ま

ず裕福な層を対象に顧客を開拓していったことは、この点でみごとに的中した。）

消費文化が入ってくることによって、民衆がますます貧しくなっていくという典型的なスタイルが化粧品にもあてはまる。（この「貧しさ」の種類とは例えば、水道の無い所で水の代わりにコーラを買って飲む状況にともなう貧しさである。）それまで全く必要としていなかったものを、いかにも進んだ生活のシンボルであるようにあてがわれ、錯覚し、買わされてしまうのだ。

スラムの中へも化粧は入りこんでいる。人間らしい生活のための基本的な環境や物質すら保障されていない彼女たちの、依り所を求める心のすきまに化粧品が入りこんでいく。「豊かさ」を錯覚させ、麻薬のような役割を果たすのだ。しかし、そのために高い金を支払う彼女たちの生活は、実質的にはますます貧しくなっていく。

このような「貧しさ」の質、つまり化粧品のような本来無くてもよい消費物資が、人間らしい暮らしのために必要なもの、基本的なもののより先に、生活の中に持ちこまれていくというアンバランスは、そのままだ、マニラやバンコクの近代的な高層ビルとスラムとのアンバランスな

光景につながる。日本の企業が儲けるために、手前勝手にもちこむモノや価値観が、そのアンバランスさをより助長させている。

化粧品があたかも文化のパロメーターであるかのような錯覚をつくり出している化粧品産業という虚業がアジアにおいてどんな部分を食いのにして成り立っているのか、その構造を私達はしっかりとらえ直さねばならない。

化粧品、その欺瞞に満ちたもの

化粧品がいかにもインキな商品であるかは、消費者運動などを通じてすでに明るみに出されたことである。化粧品の原価と売値の差は、時に百倍以上もちがう。化粧品メーカーは、高級品イメージをつくり出し、高い値段で売られるように仕向けてきた。アジアで売られている化粧品の価格は、日本の価格をそのまま現地のレートにおきかえたものである。だが所得水準に差があるので、実質的な値段の重みは数倍にもなる。例えば韓国で売られている資生堂クインテス・スキンローションは五千五百ウォン（日本円に直すと二千六百七十七円）で、これをかう側の韓国の女子労働者の月給は、工場労働者で三万ウォン、事務系で五万ウォン（いずれも79年当時）である。一般

の女性に容易に手に入る価格ではないことがうかがえる。それでもなおかつ買わせようと、訪問販売メーカーの中には分割払いシステムで売っているところもある。

化粧品の持つ毒性についても、すでに明らかにされている。化粧品を使うことによって日本の女の肌に蓄積されたその毒性は、肌の自然な代謝を衰えさせ、ひどい時には黒皮症にまで至るようなシミをつくり、内臓疾患や婦人病までひきおこす。このような化粧品被害が多くの女性を苦しめている。

しかし、このような事実があるにも関わらず、「シミ、ソバカスをとる」、「肌に栄養を与え、健康な素肌をつくる」などという不当な宣伝がアジア各地で行なわれている。日本より暑く、日射しの強い東南アジアで、このような化粧品を多用したらどういうことになるか。日本の化粧品産業がアジアの女性たちの肌を破壊していくのを黙って見すごすわけにはいかない。

自己を問い直すことから

化粧品と対峙するとき、まず問い返さねばならないのは、我が身のことである。化粧品産業の文化支配を許してしまっている日本の状況に、私達はストップをかけなければなら

ない。そのためには、個々が日常のレベルで自分と化粧との関係を洗い直していく必要がある。女を愚弄することと成り立ってきた化粧品産業のつくる「美」をハネ返していく自覚をもつことだ。さらに、アジアの女たちにできる限りの情報を伝える義務が私たち日本の女にはある。そして声を合わせて、多国籍化粧品企業に「NO」と叫び、化粧品産業のアジア侵略をくい止めなければなら

女の心理に入りこむ化粧品

マレーシアのカンボンで

かつてこのカンボン（村）では口紅といえは歯磨きやボサボサのトレードマークだった。今やカンボンの女性たちは、化粧なしではいられないほどになっている。

訪問販売の方法を通じて、化粧品はカンボンに深く入りこみ、化粧品会社の先導にしたがって女たちはその大消費者に姿を変えていく。

メーカー（ここではイボン社）から製品を買い上げてディーラーになるのは、やはりカンボン出身の女性。彼女は語る。

「化粧する女性は、私が販売を始めた一年前から比べると、四倍に増えています。カンボンの女の子達は、化粧品を買ったのに金に糸目をつけなくなっている。彼女たちは化粧をしたらから服装やヘアスタイルも変え、流行やブランドに敏感になっていきます。私がカンボンの女性に化粧品を売

- らない。
- （戸田杏子・草野いづみ手塚洋子・富沢由子・岡田美緒子）
- ※1 平沢正夫著「不良化粧品一覽—養生堂反論せよ」三三書房 一九八〇年より
 - ※2 シセイドウニュース 55—11 No.8 0132
 - ※3 一九八〇年、薬事法の改正により、「化粧品の効能の範囲」も改められ、このような表現は削られている。

家族計画と

避妊薬

強力な避妊薬と 第三世界の女たち

綿貫礼子

デポとは何か

デポ・プロベラは一回うつと三ヵ月は効力があるという強力な注射避妊薬だ。アメリカの多国籍企業・アップジョン社が一九六七年に研究をはじめ、テストを繰り返しては食品医薬品局（FDA）に市販の許可を申請した。ところが七一年に動物実験で発ガン性があることが立証され、結局七八年、FDAはデポを許可しないと通告する。アメリカ国内の工場デポを製造することも、国外に輸出することも法的に禁じられたのだ。それでもアップジョン社は生産することをあきらめず、ベルギーの下請工場から国外、特に第三世界へと輸出するようになった。ある調査

によると、八〇年までに八二カ国五百万人以上の女性がすでに使っている。

デポの問題がとりあげられるようになったのは、ここ二、三年のことだ。アメリカの女性解放のグループが、グアテマラ、コスタリカで何かおかしいことがおこなわれていることを、草の根の交流を通じて知ることになってからだ。現地では、デポによる被害がでている。彼女たちは調査をおこない、公聴会を開き、事実を暴露しはじめた。

デポ—二つの実例

デポがどのように使われているか実例を二つ紹介したい。一つは、八

六月の女大生は、「家族計画と避妊薬」というテーマで、二人の専門家、綿貫礼子さんと飯島愛子さんを迎えた。綿貫さんは環境が女の体・次の世代に及ぼす影響について研究しており、飯島さんは女と子供の健康を守るという立場から、開発途上国における家族計画に実際にたずさわっている。人口・家族計画は様々な問題をふくんでいる。二人の問題提起を受けて、私たちもこのことについて考えていきたい。

人口・家族計画の 基本的問題について

家族計画とは、本来、女性と子どものからだ健康の問題としてすすめるべきものである。

日本では戦後、急激に出生率が減少したが一九五四年当時でも年間百四十万の人口増加が報告されており、実際の件数はその一割近くになるだろうといわれていた。コンドームの手段を持たない女性たちの苦しみを見たと産婦人科や保健婦さんたちが家族計画運動に熱心に参加し、日本での家族計画は今日のように一般に普及した。

一九五一年には、家族計画を国際的にすすめるための民間組織「国際家族計画連盟」が設立された。創立当時は、イギリス、アメリカ、スウェーデン、西ドイツ、オランダ、インド、香港、シンガポールの代表者が集まった。この中にアメリカで初めて産児調節を唱え、長くその運動に携わってきたマーガレット・サンガーがいた。子どもの数と出生間隔をコントロールするための適切な情報とサ-

体内に蓄積することになる。そのう
えビルのように医者の処方に従って
使うという規定も、デポにはない。
難民キャンプの女たちのように、デ
ポを使うか使わないかという選択も
許されないような状況がつくられて
いることは大変こわい。

もう一つは、七〇年代後半からデ
ポが使われはじめている南アの例。
病院で出産し退院する時に、多くの
女が説明もなしにいきなり注射され
た。なんの注射だと問いただすと、
デポだと答えたという。これから授



家族計画センターで、デポを注射するためならんでいるタイの女たち

乳しなければならぬ母親に、人工
ホルモンの注射をしたと知ってゾー
ッとした。あるデータによると、
デポを注射したお母さんから赤ん坊
が一日六〇〇〜八〇〇ccの母乳を飲
むとすると、そこには人工のホルモ
ンが一〜二マイクログラムはいって
いるという。デポが使われはじめた
のはここ四〜五年のことなのだ。子
供にどんな影響があるかまだはつき
りしないが、母親自身も多量の人工
ホルモンを授与されるため性ホルモ
ンのバランスがくるっている。これ
から男性ホルモンや女性ホルモンの
支配で成長し、男や女の体になって
いく子供たちが、この母乳を飲むの
だ。現在、実態を追跡調査している
人もいる。

世界をまわる経路

デポが世界をまわる経路は、かつ
て調査した農業の経路と全く同じで
あることがわかった。アメリカの国
際開発局が一手にひきうけているの
だ。開発を援助するという名目で、
国連の人口活動基金、国際家族計画
連盟などの国際機関やその他、民間レ
ベルでの様々な人口抑制プロジェクト
に資金援助をし、世界各国にデポを
売る根まわしをしている。特に、
七九年頃からデポをダンピングして、

「これは待ちに待った避妊薬」とい
うキャッチフレーズをつけ、アッパ
ジョン社のベルギー工場から直接第
三世界に、それも大箱で買ったら安
いというように、すごい勢いで売り
つけている。

しかし、この恐るべき事実があま
り知られていない。デポによる人口
抑制政策を立案している人は、正し
いことをしているのではないとわか
っているのに、コソソリとする。同時
に人口問題というのは一見倫理性が
あり、援助していますよというニュ
アンスが強いので、事の本質が見落
されがちだ。第三世界の消費者たち
は、実態をまったく知らされていな
いどころか、女たちは注射の目的を
も告げられていないというケースが
、実際にあげた国のみではなく世界に
たるところにある。

女たちの反対運動

デポの問題に対して、女たちはど
う闘っているのだろうか。アメリカ
の女性解放のグループは、アメリカ
の女性に安全でないデポがどうして
第三世界の女性には安全なのかと、
政府や多国籍企業・アップジョン社
を糾弾している。七八年には、アイ
オア州で「女性と多国籍企業」とい
う大きな会議を開催し、デポの問題

ピスを人々に提供するため、政治、宗教、国
を越えて活動するという主旨のものであった。
一九八〇年現在で加盟国九十五カ国、各国そ
れぞれ九十五の民間団体がメンバーになって
いる。日本では、日本家族計画連盟が加盟団
体である。

一九六〇年代後半に入ると、世界の人口問
題が深刻化してきた。一八三〇年に最初の十
億に達した世界の人口は、次の百年で二億の
二十億、次の五十年でそのまた二倍となり、
現在、推計四千四百九十五百万（一九八一年
九月一日国連発表）となっている。さらに二
千年には六十三億を越えるだろうといわれて
いる。

一九七四年は世界人口年と定められ、ルー
マニアのブカレストで世界人口会議が開かれ
た。百三十五ヶ国が参加し、「全人類に世界
は一つのスローガン」を掲げ、世界人口行動
計画をつくらうということと議論がなされた
が、参加国の意見は政治・経済・社会・宗教
に根ざす考え方の違いから大きく分かれた。
特に中南米、アフリカ、東欧諸国などは「開
発途上国の人口増加は、従来の社会経済制度
の矛盾から生じたものであり、その根本原因
は開発が遅れていることにある。だから開発
の促進がまず求められるべきだ」と強く主張
した。その結果、「自国の出生率がその国家自
標を阻害する」と考える国は量的目標を設定し、
一九八五年までにその実現をはかるための政
策をとることが要請される」との修正案が決
議された。

国連人口活動基金は毎年、世界の人口・家
族計画に関する実態報告を出しているが、一
九八〇年の報告で次のように述べている。

をとりあげた。彼女たちは、この会
議に参加した第三世界各国からの留
学生たちに、デポの情報を自国の人
たちに伝えてくれるようにと依頼し、
草の根の運動を通じて情報交換をす
るなど、地道なキャンペーンをつづ
けていくとしていた。また資料を
キチンとつけた論文やパンフレット
がでていて、これらを読むとこのひ
どい状況を一刻も早く第三世界の女
たちに報告しなければという焦燥感
がうかがわれる。

デポによる人口抑制政策は、女性
差別はむろんのこと、民族差別・人
種差別の構造がある。本来ならば人
口問題は、生命の尊厳という基本的
な思想に裏づけられなければならない
のに、それは全く違った形で女
の体が蝕ばれていく。そして一度
蝕ばれたら、とりかえしのつかな
いことになる。

ベトナム戦争・枯れ葉剤

体内に吸収された毒物がどのよう
にして次の世代まで影響をおよぼす
かというショッキングなレポートを
最近読んだので、最後に紹介したい。
アメリカ軍は、ベトナム戦争のさな
か六一年から七一年まで、解放軍の
兵士が身を隠していた森林を枯すた
めに、除草剤である枯れ葉剤を南ベ



国内禁止、輸出のみ

トナムに空中散布した。ところが、
枯れ葉剤の影響により奇形児がたく
さん生まれていることが、ハノイ大
学の医者から発表された。アメリカ
はこの訴えを無視して使用していた
が、枯れ葉剤のような反倫理的なも
のを使うべきではないという国際世
論がたかまつたので、七一年、戦争
が終る前に使用を中止したのだった。
この後、八〇〇例ほど追跡調査した
結果、最初に使ってから二十年たっ
た今になって、枯れ葉剤に含まれて
いたダイオキシンの作用により、流
産が多発し、奇形児が生まれている
ことが明らかにされた。中には医者
でも驚くほどのものすごい奇形児が
生まれている。ここでは、水俣のよ

うに母体にとりこまれた毒物が、胎
盤を通じて胎児に影響するのではな
く、遺伝子障害がおきている。つま
り、南ベトナムの戦場で枯れ葉剤を
浴びハノイに帰ってきた若者が、五
年後に、枯れ葉剤を浴びていない北
ベトナムの女性と結婚してできた子
供に、ダイオキシンによる奇形児が
生まれている。枯れ葉剤は、次の世
代の遺伝子まで破壊するという意味
では、「核」爆弾と同じようなものだ。
枯れ葉剤にしろ、ビル、デポにし
ろ、結果がでているのは、ずっと後
のことだ。今生きているからいいで
はないかというのではなく、二〇年
後、四〇年後といった遠い未来を望
んで考えていかなければならない。

(文責 遠野はるひ)

●女達の現在を問う会 銃後史ノート2号

二二〇円

JCA出版 東京都千代田区神田神保町
1の42日東ビル03(292)0401

●女達の現在を問う会 銃後史ノート2号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート1号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート3号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート4号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート5号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート6号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート7号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート8号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート9号	二二〇円
●女達の現在を問う会 銃後史ノート10号	二二〇円

「先進国の出生児数は年間千八百万人、開
発途上国は一億九百万人だが、先進国の一人
の消費量は開発途上国の一人の二十人分であ
る(したがって先進国の人間は、実際には開
発途上国の約四倍の四億八千万人の資源の
消費を行なっていることになる)。また、一九
〇〇年には富んだ国に住む人と貧しい国に住
む人の富の差は四対一だったのが、一九七
〇年には四十対一になっている。

インド人が年をとった時、一人の息子に頼
れることを九五%確信できるためには約六人
の子どもを産まなければならない。開発途上
国では千八百万人が十五才以前に死んでし
まうが、子どもたちの死の四分の三は、より良
い栄養、清潔な飲料水、環境衛生、予防注射、
親への教育などで防ぐことのできるものであ
る。

一方、世界の半数以上のカップルが、予定
外の妊娠に対し無防備である。開発途上国の
女性(15才〜49才)の半数以上が、これ以上
の子どもを望まないと考えているにも関わらず
避妊のための手段を有していない。また、現
在、世界で五人の出産につき二人が人工妊娠
中絶を行なっている……等々。

家族計画とは、人口抑制の手段としてのみ
すすめられるべきではない。なかでも女性の
自らの性をコントロールする権利と自由の問
題でもある。基本的には個人の問題であり、
環境の整備、公衆衛生の発達、教育の普及、
女性の地位の向上を含めて、社会全体の状況
を良くしていくことが不可欠な条件である。
(飯島愛子 家族計画国際協力財団職員)

経済侵略も一種の戦争だ

野村かつ子

去る九月九日付ワシントンポスト

紙は「危険な製品の輸出緩和検討中」との記事をのせた。国務省と商務省が現在アメリカで禁止または使用が制限されている有害製品——たとえば、発ガン性のトリス加工をした子どもの寝まき、危険な農薬や殺虫剤など——を、今度は海外に積極的に輸出し貿易拡大をはかる、そのためには現行輸出規制の制約を取り除く必要があるというのである。ラルフ・ネーダーグループはいち早くこれに反応、おおよそ次のような手紙を同紙編集局へ送付した——「もしこのような検討が現実化すれば、それは世界の消費者にたいする宣戦布告だ。一九七二年、アメリカは国内で使用禁止されていた有機水銀殺菌剤をイラクに輸出し、これをつかった小麦の加工品で四百人のイラク人を死にいたらしめた。またこれと前後して、エジプトを含む少くとも三十カ国へ化学殺虫剤レプトホスを輸出した。この殺虫剤にさらされた農民は幻覚症状や言語障害におそわれ、死亡した。その数は測りしれない。

多国籍企業の罪状

いま日本はあちこちでキナ臭いにおいがくすぶっている。戦争は、どんなことがあっても反対しなければならぬ。だが、いったい、戦争とは、武器で戦うことだけが戦争なのだろうか？ 私はいつも疑問に思う。上記のようなイラクやエジプトの農民の死も、多国籍企業の経済侵略の人為的毒牙による結果ではないか？ この話は決して十年前の昔物語語りではない。いまも、これと同じことが途上国で常時進行している。しかも合法性と「開発援助」という美名のもとに。例えば、石綿を原料にした不燃繊維アスベストは、アスベス

トシス」という激しい慢性呼吸症だけでなくガンを誘発する。だから工業国では製造・使用が減退し、代って途上国に新市場を求め、現地生産へと多国籍企業はスイッチを切りかえている。途上国の労働安全基準は先進国に比べ五〇年遅れているといわれる。まさに多国籍企業にとっての天国、それに賃金も安い。このことはまた途上国労働者の生命軽視ともつながる。危険なものは彼たちに生産させ、出来上ったものを輸入する。この図式はいまでは一般化している。ちなみに、西側のアスベストの輸入は一九七三年以降倍増したそうだが、インドの西南にアメダバッドという市がある。ここにアスベストを生産するアメリカの小会社がある。アスベストの廃棄物を道路にすて、そのうえで子供たちが遊んでいるという。IOCU第10回大会で書いたような報告に、激しい怒りを私は覚えた。日本の多国籍企業も例外ではない。「武器によって殺されようと、経済侵略によって殺されようと、殺される方にとっては同じだ」と、か

つて国際消費者機構(IOCU)会長のアンワー・ファザールさんは私にいったことがある。

消費者運動はいま

現段階における消費者運動の課題の核心とは何か？ それは国内にあつては浪費を人々に押しつけ、国外にあつては、途上国への経済侵略によって最大利潤を獲得しようとする、まさにそういう性格をもつ資本の横暴を生活の場から切り崩し、闘っていくことだと私は思っている。人は往々にして、消費者運動を個別製品のテスト活動に限定しようとしたり、或いは一円安いとか高いとかのソロバン勘定に置きかえたりする。それも運動の端緒にはちがいない。しかし、終極的な運動の目標は、トータルとしての人間存在の尊厳を生活面から追求し、これを阻害し、破壊するものを、国内レベル、国際レベルで排除していく一連の闘いだとは私は信じている。

第三世界への開眼

オランダに本部をもつIOCUは世界各国の消費者団体を糾合した国際機関である。マレーシアのペナンにもIOCUのアジア太平洋事務局がある。現在の加盟国は五十カ国、一三〇団体をこえる。国連の専門委

員会にも代表を派遣し、国際的にも認知されている。各国まわりもちで三年に一度の大会、その間に研修会を一回開く。一九六〇年に創設された当時の目的は個別製品に関する情報交換であつたが、今ではもっと広く、各国の情報交流のひろばの性格をおびている。

界の消費者が手を結び、多国籍企業の第三世界における非社会的行状を監視しストップさせようというのである。

とくに一九七八年の第九回ロンドン大会でアンワー・ファザールさん(マレーシアのペナン消費者協会出身)が会長に選ばれてから、従来の白人主導の伝統は、次第に第三世界の人々の手に移っていった。この傾向をハッキリと浮き彫りにさせたのが、去る六月のハーグで開かれた第10回IOCU大会だった。最終日の決議は「消費者警察」の設置を決めた。世

私は七四年のシンガポールのセミナーから、IOCU関係の会議に四回、国連ESCAP会議に出席し、ペナン消費者協会を二回訪ねた。その都度、私は自分の目から第三世界にたいする自分の無知のうろこがはがれていくのを経験した。例えばペナンでは、ホリデー・インというアメリカ資本のホテルに泊った海をバックに建てられたこの堂々たるホテルには、欧米の富裕な白人たちがゆったりと避暑を楽しんでいた。グリーンのスマートなユニフォームをきたホテルのボーイさんたちは現地調

達され、一定の訓練をうけた若ものであつた。金持ち客がこのホテルにおとす現ナマは地元をうるおし、雇用もふえ、さぞかしこのあたりは結構なことだろうと思つた。しかし見ると聞くとは大ちがいが。従業員の給料は一月一〇〇ドル。野菜や果実、肉、魚、卵などの生鮮食料品が毎日、近郊からこのホテルへ運ばれる。遠隔の地からも。その結果、周辺地区の物価はつり上がり、貧しい庶民のフトコロは益々狭く、ホテルにおちた現ナマは地元を素通りしてホリデー・インの本拠アメリカへ一足とびに渡ってしまう。「東洋の真珠」と呼ばれたこのあたりの海も茶褐色の絵の具をとかしたように汚れてしまった。売春はどうだろうか？

ペナン消費者協会の若ものがこのホテルについてもひそかに調べていた。同じようなことをその他のところでも聞かされた。日本の底曳き漁船がアジアの海から稚魚までガツボリもっていき、もち去った魚をこんどは缶詰にして高い値段で売りつける。これは一九七四年にシンガポールで開かれたIOCUセミナーの分科会である婦人が怒りをこめて訴えた話である。マレーシアでも魚について同じようなことをいわれた。マレーシアはかつて「世界の森林の宝庫」と呼ばれたそうだが、いまでは伐

採がどんどん進み、その多くは日本へもっていかれる。「祖先が残した唯一の遺産を破壊するな！」の文字が刻まれたポスターが、ペナン消費者協会の壁にはつてあつた。日本へ帰ってから、毎朝の散歩で、路上に落ちていた木くずをみる度に私はマレーシアのことを思い出す。香港セミナーでスピーチに立つたフィリピン大学法学センターのゼナイダ・S・ライエス女史の訴えもひどくこたえた。細かい数字をあげながら、彼女はフィリピン経済の構造について包括的な説明を行い、「第三世界が貧しいのは、先進工業国がわれわれの国から資源を安く買い叩き、それを加工して、われわれに高く売りつけるからだ」ときめつけた。私はハッと

した。私たちの目のとどかないところで、今日も、このような多国籍企業の経済侵略が進行しているのだ——第三世界はこのことを私に教えてくれた。



ペナン消費者協会のポスター
(日本消費者連盟発行・「アジアからのレポート」による。)



くらしのなかのアジア

アジアから日本へ

食卓から見た食糧問題

内海愛子

「食卓に世界の味を」

スーパーの折込広告に「食卓に世界の味をおとけします」とのキャッチ・フレーズが踊っている。

「澄んだ空のアメリカから、牛サローイン・ステーキ用一〇〇グラム四八〇円」

「畜産王国デンマークから、豚かたロース一〇〇グラム一三八円」

「しゃもの故郷タイから、若どり骨付も一〇〇グラム七五円」

そのほかアリゾナ産の新レモン、ハワイ産パイア、ニュージーランド産キーウィフルーツがあり、フィリピン産パイナップルなどは一本二

五〇円の日替サービス品、フィリピン産バナナは一〇〇グラム一五円の大安売りである。

こんな広告を見てもあまり驚かなくなつたほど、私たちの食卓には世界の食料品が並んでいる。直接、口に入るこうした食料品から、原料として使用される輸入食糧まで含めると、われわれの生活に占める海外からの輸入品は、一体どれぐらいになるのだろうか。

肉を例にとつて考えてみよう。

牛肉の輸入量は、一九七九年には約一三万トンに達しているが、それでも国産の約四〇万トンに比べて三分の一にもならない。豚はさらに国

産の比率が多く、輸入豚の二〇倍にも達する。アメリカの牛肉、デンマークの豚を食べなくとも、肉に関してはまだまだ国産肉で十分間にあう。肉の国内自給率は八〇％（一九七八年）と高い。

だが、問題は、牛や豚やにわとりを食べる飼料である。一昔前のように残飯を食べさせて、豚を飼うような畜産はほとんど行われていない。大麦、とうもろこし、ライ麦、オート麦、など飼料穀物が海外から輸入されて畜産が営まれている。これら飼料の海外依存度は九一％にも達するという。

肉を食べる

日本が輸入する飼料穀物は、全世界貿易量の一八・一％（七八年FAO統計）を占める。私たちが、国産の豚肉を食べ、牛肉や鶏肉を食べたと

しても、それはこれらの穀物を牛、豚、鶏の体を通ささせて、肉にかえて食べていることなのである。肉に姿をかえたとはいえ、日本が世界の飼料穀物の一八・一％を消費していることには変りない。

この飼料穀物は、初めから家畜用として生産されたのではない。とうもろこしは、発展途上国では立派な食糧である。戦後、私たちがとうもろこしをかじり、その粉でパンを焼いて飢えをしのいだことを考えれば、とうもろこしを飼料と考えるのはおかしい。飼料なのは、日本が家畜飼料用として輸入しているからにすぎない。このように、先進国は穀物の七二％（四億二〇〇万トン）を家畜用に消費し、人間が食べるのは二八％、わずか一億六四〇〇万トンにすぎない。発展途上国の場合、八七％（五億三八三〇万トン）が人間用、家畜はわずか一三％の七九八〇万トンである。この数字を見ると、先進国の家畜は、全世界穀物生産量の三分の一を食べていることになる。

牛肉を一キロつくるためには、三キロから九キロの穀物を必要とするといわれる。日本人の一人当たり年間肉消費量は、二二・一キロ（九七九全部牛ばかりではないことはもちろんだが、一応牛に換算すれば六六から一九九キロの穀物を食べたこと

になる。米の年間消費量八〇キロと比較すると、肉のかたちで摂取する穀物量の多いことに気づく（なお、一九六〇年の肉の消費量は、三・四キロである）。

アメリカに抑えられた台所

小麦や大豆の自給率の低いことは、今ではかなり広く知られている。

小麦の自給率は六％（一九七八年）、大豆は何と五％にすぎない。（農水省食糧自給表）

大安売りの広告をにぎわす小麦粉、みそなどは、まず、一〇〇％海外からの輸入に依存していると思つて間違いないだろう。アメリカの大豆の不作はすぐさま価格の暴騰につながり、小売価格にはねかえる。七二年の豆腐の値上りは、いまだ私たちの記憶に新しい。日本は全世界の大豆輸出の一七％を輸入している。飼料穀物に次いで、貿易量に占めるシェアが多い。小麦は七・三％を占めている。今や日本は、世界の穀物輸入量の一〇％以上を輸入する農産物輸入国となつてしまつた。

これらの農産物は、いずれもその大半をアメリカから輸入している。大豆の九七％、飼料穀物六三％、小麦五九％と、アメリカへの依存度が著しく高い。

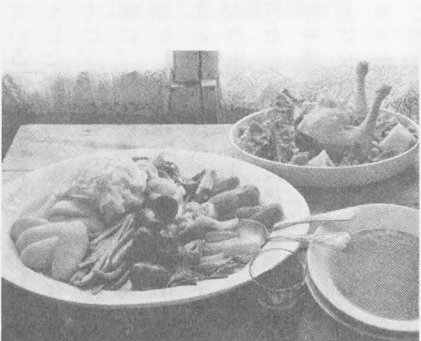
日本の農産物輸入額一一三億四千

万ドル（綿、羊毛及び天然ゴムを除く）のうち、四一％の四六億一千万ドルをアメリカに支払うというのだから、アメリカからの農産物の輸入がとまれば、われわれの食卓は、そのまま影響を受けることになる。日本人の食生活は、今やアメリカの食糧戦略にガッチリ抑えこまれ、アグリビジネスの動向がそのまま生活にひびく構造が出来あがつてしまつたといつてもよいだろう。

石油をのむ

こうした農産物に対し、九七％の自給が出来る野菜、一一一％の自給が達成できている米がある。米さえ自給できれば心配はないと考える人もいのではないだろうか。

しかし、これも国産の牛や豚と同じ原理で動いている。野菜に「ゆん」がなくなつたと言われて久しい。真冬にきゅうりやトマトを食べることもあたりまえのようになってしまつた。全収穫量のうち、トマトの三割きゅうりの四割、ピーマン、いちごの過半数が、ビニール・ハウスやガラス室で生産されている。ハウス栽培の場合、トマト一個につき牛乳ビン一本、きゅうり一本につき二分の一本の石油をつかうといわれる。メロンの場合は、一個につき石油缶一缶もの石油が必要だという。



ビニール・ハウスのなかで、化学肥料と農薬をたっぷりかけられ、成長促進剤をシュースーとふりかけられたトマトやナスを食べることは、牛乳ビン何本かの石油をのんだのと同じエネルギーを消費していることになる。野菜は自然の恵みなどと言つては、もはや笑われそうだ。農協を通じて販売される農薬、化学肥料を十二分に吸収し、重油をたいたハウスのなかで、タッパー暖められて成長した野菜は、まぎれもなく石油製品である。自給率九七％は、九七％が日本の国内でとれるとの意味にすぎない。

米と石油

米は供給が必要をうわまわる唯一の農産物である。クボタやキセキの農業機械が農業生産の中心である。

農業の機械化が、三（二）チャン農業を可能にし、出稼きによる兼業農家の増加をうながした。また、機械貧乏という言葉があるように、機械化したから出稼させざるを得ないとの現実も起きている。

動力耕運機・農用トラクターは、一九七九年に四二六万台も普及している。日本の農家戸数が、専業、一種・二種兼業をあわせて四七四万戸であるから、九五％の農家が耕運機をもっていることになる。日本全国どここの農家でも、耕運機を使う農業に転換してしまつたのである。

動力田植機は三四％、バインダー三八％、乾燥機三一％、動力散粉機三〇％と農業機械の普及はめざましい。これらの数字は、各農家所有の比率である。これに、農協などの所有をあわせるとその比率はさらに高くなってくる。

これらの機械が石油からつくられ、また、これを動かすのに石油が必要なのは、誰もが知っている事実だ。化学肥料を施し、農薬を散布し、機械で乾燥する米もまた、形をかえた石油製品といつてもよいだろう。

私たちの現在の食生活は、自然の恵みを分かちあい、自然の営みのなかで共に生きるなどといった牧歌的なものではなくなっている。農機具、農薬、肥料、飼料などの大企業製の

品に依拠してつくられた工業製品、形をかえた石油製品、それが私たちの口にする食糧であると言っても過言ではないだろう。

浪費するエネルギー

私たちのこうした食生活を維持するのに、一体どれぐらいのエネルギーを消費しているのだろうか。

アメリカ人一人当りのエネルギー消費量が大きいことはもちろんであるが(日本人の約三倍)、ここでは日本人を中心に見てみよう。私たち一人が生きていくのに必要なエネルギー量は、インドネシア人の約二六倍、ナ

イジェリア人の三九倍にもなる。日本人一人が生きていくのと、インドネシア人二六人が生きていくのと同じエネルギーを使っている。今、地球上に八億人を上まわる人々が飢餓に苦しんでいる。西暦二千年には、この数はさらに増加するといわれている。

その一方で肥満に悩むアメリカ人がおり、日本でもまた「ビスラット・ゴールド」や「マンナライフ」が売られ、やせる食事や体操が商売になる時代になった。世界の食糧は、必要とところへ流れるのではなく、ドルをもつ豊かな国へと吸収されていく。誰が食糧の分配と流通を牛耳っ

日本は魚どろぼうだ！

山鹿順子

今でもエビを見るたびに目に浮かぶ光景がある。ぎらぎらした炎天下を「漁民闘争の勝利！」を叫びながら、色とりどりのサリを身にまとったインド・ゴアの漁民の女たちがデモ行進している姿である。三年近く前になるが、今でも彼女らの叫び声が聞えてくる。

その光景と、日本の沿岸で火電、原発、CTS等の立地に反対して怒る日本の漁民の姿がだぶって見える。

己れの利潤、そのための生産性を求める資本の行動、それを支える政策は、海を生活の場とし、魚の供給者たる漁民を無視し、切捨てていく。インドにおいても、日本でも、他のアジアの国々でも同じように。

ゴアの漁民を例にとろう。彼らは「ランポンカー(網をもつ人)」と呼ばれ、代々共同体的性格をもつ一種の地引網漁法をもって漁労に携わってきた。非常に労働強化な作業だが、

ているのか。われわれは、日々、こうした食糧の分配のあり方など考えずに、安い肉を買い、珍しい世界の味に、つかの間の安らぎを得ている。しかし、現在の私たちの生活を維持するのに、二六人分のインドネシア人の生きるカロリーを奪っているとしたら、私たちは第三世界の人々がやせ細る分だけ、肥え太っていることになる。飢え苦しむ人々に百円のカンパするだけではなく、どうしたらこの食糧の不平等な分配を変えられるのか、自分の生活のなから問い直していく必要があるのではないだろうか。

闘うゴアの女たち



インドではこうした伝統的漁業で生計を立てている漁民は、家族を含め六百五十万人いるといわれる。大陸棚の広がる海に囲まれたこの国の漁場は豊かで、伝統的沿岸漁民の獲る魚は、国全体の魚獲高の七五%を占め、国民の主要な蛋白源となってきた。獲った魚を大きなかごに入れ、頭のにせて売りに出るのが女たちの仕事である。

ところが、こうした伝統的漁民が危機的状況に追いこまれた。トロール船の急増によるものである。この海に豊富なエビが輸出に向き、金儲けになると知った金持ちが、次々にトロール船を建造し、操業を始めた。

「海の殺し屋」といわれるトロールは、目的がエビの輸出にあり、元来漁民でない人々によって利潤追求のためのみに出漁する。そうした性格が故に、乱獲するのは当然で、特にエビの育つ沿岸近くまで入ってくる。そのため沿岸漁民の漁場はすっかり荒され、漁獲が目に見えて減少、生活が脅かされるまでになった。

それ迄も何回も政府に訴え、ハンストを行うなど様々な抗議行動を行ってきたが、無視されるのみならず、抗議のデモでは多くの漁民が逮捕された。遂に堪忍袋の緒が切れ、平和的手段ではどうにもならないと悟った漁民は、トロール船焼打ちという実力行使に訴えた。冒頭に触れたデモは、その翌日、漁民の女たちを先

頭に行われたものである。

日本漁業の実体

今なお世界一の漁獲高を誇る「水産王国」日本の漁業は、国策としての「遠洋」漁業を中心に、世界中の海を我がものとしてきた。「遠洋」といっても、漁場の大半は他国の沿岸で、いわば他人の畑の野菜を勝手に失敬してきたようなものである。

そうした勝手な行為に対する各国の怒りが、所謂二百海里体制を産み出した。他国の沿岸からしめ出しをくった水産業界のとった次の戦術は、合併会社設立であり、半開発輸入方式であり、上陸作戦であった。商社と組んだ大手漁業会社は、資本力と近代技術・設備をもって「漁業開発」を援助するという美名の下に、大型・資本漁業を導入、そこでとった魚を日本に輸入するという方式である。従ってこの数年日本の水産物輸入量は上昇を続け、漁業生産量の二〇%近くを占めるまでになっている。中でも冷凍エビの輸入の増大は、この十年で三倍近く、国内供給量に占める割合は、七割以上になっている。

このことが現地の漁民・民衆にとって、どういう意味をもつのかは、ゴアの漁民の苦境に示される。輸出用「金の卵」となったエビは、価格

がはね上り、アジア各地で民衆とは無縁のものとなった。漁民の漁場は荒され、漁民の生活が脅かされるだけでなく、民衆にとって貴重な蛋白源としての魚が枯渇するという現象も生み出される。

一方、日本国内の沿岸漁民は、先ず戦後の高度経済成長政策の犠牲になった。生産性の高い工業優先政策は、好漁場であった沿岸を埋立て、コンビナート、工場団地と化し、漁民から漁場をとり上げた。そして現在、新たなエネルギー政策は、実に残された沿岸を、火電・原発・CTS・LNG等の基地にしようとしている。自らもてる豊かな漁場を破壊し、そのかわり魚は、他国の漁民・民衆から収奪してまかなおうという構造である。

そればかりか、日本の原発から出る「核のゴミ」を、太平洋に投棄する計画がすすめられている。「海に頼っている私たち島々の住民は、その大切な食糧源と資源を汚染されようとしています。マグロ・カツオは汚染されて、あなたたち日本人の食卓にもものぼるでしょう。」と訴える太平洋民衆の声と、ゴアの漁民の叫びは、日本で輸入品のエビやマグロを食べる我々に向けられている。彼らの声を無視し続けるならば、そのツケは必ずや我々にまわってくる。

食卓をいぎわす輸入エビ

エビフライ、エビの天ぷら、エビピラフ……ちよつとせいで沢だが、そんなに無理をしなくても手が出せる。エビを使った料理には、そんなイメージがある。しかし、伊勢エビ、車エビとちがって、今では輸入の冷凍エビはかなり大衆的な食べものになった。

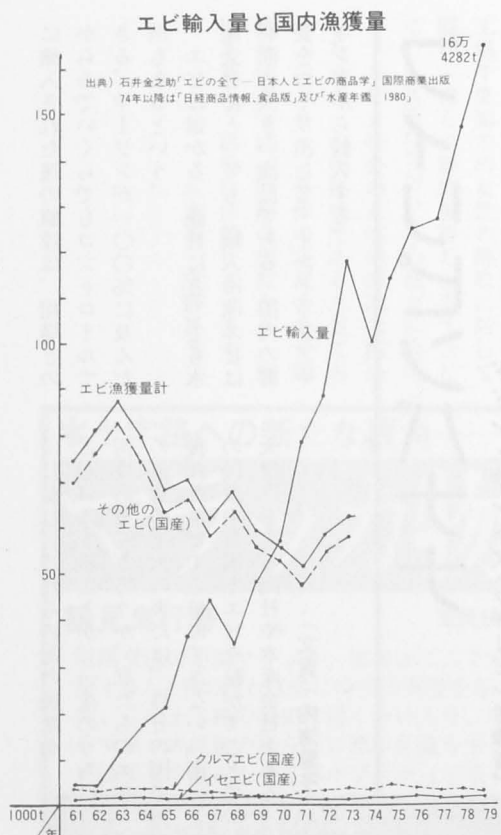
私たちが、エビを気軽に食べるこ

とができるようになったのはいつ頃からだろうか。記憶ははっきりしないが、この五十六年であることは誰の目にも明らかであろう。この気軽に

食べるエビのほとんどが輸入であることを知っている人は少ない。エビの現状がどうなっているのか、三国太郎氏の「輸入冷凍エビについての一考察」と題するレポートから、エビの現状を考えてみよう。

一九七九年のエビの輸入量は一六万四二八二トンと、過去の最高を記録している。これは金額にすると、輸入水産物の総額の三三・六%(三一二億円)と、単品では最高の金額である。

国内のエビ漁獲量が減少している





英文「AMPO」VOL.13 No.3より

者は、一週間のうち三、四日しか働けないこともあります。というのは、あまりにも沢山の女の人たちが働きたいため、みんなが働くためには、日数を限らなければならぬのです。日給は、基本給と手当を含めて二十二ペソ（一ペソは三十円なので約六百六十円）ほどですがこれさえもらえず、基本賃金の十一ペソしか受けとれない女性もいます。一週間に四日しか働けないとすれば、四十四ペソ（千三百二十円）にしかならないことになります。

ドールというバナナ会社は、女子労働者に農業を扱わせています。農薬を扱うときには、ガスマスクと手袋をすることになっていますが、それにもかかわらず、ある一定期間、この仕事をするとは妊症になってしまう。

インドネシアには、エビ関連の日系企業が二〇社ある。これらの会社は、インドネシアの企業と組んで、漁場を確保し、そこでとれたエビを一〇〇％日本へ輸出する。日本の商社と水産会社が、漁獲、加工、輸入、国内販売を一手にひきうけるので、相手国のパートナーとなった会社は、ほとんど何の役割もはたしえない。漁場確保（認可・許可の保有者）のための名目に使われているといってもよい。

インドネシアから輸入されるエビは、このような「開発輸入」と呼ばれる方法をとっており、製品化は日本の手で行なわれている。合併相手の企業は、利潤のわけ前にあずかるだけの企業といってもよいだろう。このようなシステムのなかで、輸出価格のコントロールは比較的容易である。

日本とインドネシアとの合併でつくっている会社が輸出する。ここで利潤が出れば、日本とインドネシア双方に利潤が分配されることになる。従って、この利潤分配を低く押えるために、輸出価格を安くする。日本

冷凍エビの九〇％以上が、三菱商事、丸紅、三井物産、伊藤忠、大洋漁業など、大手商社と水産会社による。

一九六一年七月、エビの輸入が自由化された。それ以降今日まで、増加の一途をたどった輸入エビは、一体誰の手によって、日本へ送られてくるのだろうか。

このエビは、六二カ国から、輸入されるが、最大の取引相手はインド（三万九千トン）、ついで、インドネシア（二万九千トン）、オーストラリア（一万二千五百トン）、中国（一万二千トン）、タイ、マレーシアと続く。インドネシア産のエビは、輸入量は第二位だが、輸入金額では一位を占めている。これは、インド産のエビはサイズの小さいものを中心となっていて、量が多いが価格が低いのに対し、インドネシア産は比較的値の出る大きいエビが輸入の中心にすえられていることを示している。（参考までに、インドネシア二億五千九百万ドル、インド二億五千万ドル）

インドネシアには、エビ関連の日系企業が二〇社ある。これらの会社は、インドネシアの企業と組んで、漁場を確保し、そこでとれたエビを一〇〇％日本へ輸出する。日本の商社と水産会社が、漁獲、加工、輸入、国内販売を一手にひきうけるので、相手国のパートナーとなった会社は、ほとんど何の役割もはたしえない。漁場確保（認可・許可の保有者）のための名目に使われているといってもよい。

インドネシアから輸入されるエビは、このような「開発輸入」と呼ばれる方法をとっており、製品化は日本の手で行なわれている。合併相手の企業は、利潤のわけ前にあずかるだけの企業といってもよいだろう。このようなシステムのなかで、輸出価格のコントロールは比較的容易である。

日本とインドネシアとの合併でつくっている会社が輸出する。ここで利潤が出れば、日本とインドネシア双方に利潤が分配されることになる。従って、この利潤分配を低く押えるために、輸出価格を安くする。日本

インドネシアには、エビ関連の日系企業が二〇社ある。これらの会社は、インドネシアの企業と組んで、漁場を確保し、そこでとれたエビを一〇〇％日本へ輸出する。日本の商社と水産会社が、漁獲、加工、輸入、国内販売を一手にひきうけるので、相手国のパートナーとなった会社は、ほとんど何の役割もはたしえない。漁場確保（認可・許可の保有者）のための名目に使われているといってもよい。

に輸入された後の値段は、相場とのからみでいくらかでもコントロールできる。マージンが一〇〇％に及んだ例もあるという。

エビは儲かる。商社にとっても水産会社にとっても、輸入冷凍エビは利潤の大きい商品である。国内の需要をつくり出して、インドネシアやインドから輸入する。

八〇年十一月の女大学は、「フィリピン問題連絡会議」の招きで来日したドドン・サントス氏を囲んで、フィリピンのバナナ農民の闘いについて話を聞いた。サントス氏は、ミナダオ島のバナナ農園で働く労働者である。

こんばんは。今回来日して、日本全国に、フィリピンの問題に対して熱心に知ろうとし、アジアで行なわれている不正に対して日本に責任があると感じ、そして何とかしたいと考えている人々がいることを知りました。

フィリピンの女性の最も一般的な問題は搾取の問題です。搾取には、性的搾取と労働による搾取の二種類

八〇年十一月の女大学は、「フィリピン問題連絡会議」の招きで来日したドドン・サントス氏を囲んで、フィリピンのバナナ農民の闘いについて話を聞いた。サントス氏は、ミナダオ島のバナナ農園で働く労働者である。

こんばんは。今回来日して、日本全国に、フィリピンの問題に対して熱心に知ろうとし、アジアで行なわれている不正に対して日本に責任があると感じ、そして何とかしたいと考えている人々がいることを知りました。

フィリピンの女性の最も一般的な問題は搾取の問題です。搾取には、性的搾取と労働による搾取の二種類

しかし、これらの国の民衆が、エビを口にすることが、一生のうちに何度あるのだろうか。私たちのエビの消費の拡大の裏には、自分の国で獲れたエビすら口にできない「南」の民衆の貧困とエビを転がすことで大儲けをする商社や水産会社がある。

（文責・内海愛子）

フィリピンバナナ

ドドン・サントス（フィリピン労働者）

があります。私は、バナナやパイナップル農園の女子労働者の状況を詳しく知っているのですが、労働の搾取について話したいと思っています。フィリピンには、二十一のバナナ会社があり、三千五百人の労働者が働いています。バナナ農園の女子労働者の仕事は、大きな桶の中でバナナを洗ったり、ダンボールの箱にバナナを詰めることなどです。バナナを洗う女子労働者は、手袋も買えないので、素手で農業に汚染されたバナナを扱うことになり、この作業中、立ちどおしで働きます。農園で梱包作業をする女性達も六時から十一時まで立ったまま作業をし、妊娠している女性も例外ではないので、そのために流産することもあります。女子労働

◎上原栄子著

定価980円 千250円

辻の華

くるわのおんなたち

沖縄にあった辻という遊廊。三千余の女だけの世界で、独特の生活形態、戒律、心情を有していた。ここに育ち、後に八月十五夜の茶屋を造った女の回想から辻と辻の女たちの辿った道を描く。

女の老後を考える

◎島田とみ子著

定価1200円 千250円

*十字路への新たな視角

マラッカ物語

鶴見良行著

定価1800円 千300円

東西交通の要衝マラッカ。世界はここで交差し、集散する人と物の流れは常に時代の典型を示してきた。今、この十字路の歴史に深く分け入り、そこに生きるマラッカ民衆の暮らしに想いを凝らすとき、アジアは新たな顔をもって浮かび上がってくる。

時事通信社の本

東京都千代田区日比谷公園1-3 千100 〆03 (591) 1111 振替東京 4-85000

「森食い虫」になった日本

藤原英司

一トンの紙は、長さ八メートル
 直径一六センチの原木二〇本分に相
 当し、高さ一メートル五〇センチの
 古新聞を再生にまわすと、一本の木
 と一五〇〇キロワットの電力、一万
 ガロンの水を救う。また、わが国の
 一般家庭で読み終わつた二年分の新
 聞紙は、立木一本分に相当する、と
 いわれている。つまり古紙を再利用
 し、紙を大切にすることは、人間生
 活に欠かすことのできない日常的な
 行動として要請されている。

森を裸にしていく日系企業

わたしは、オーストラリア

わたしは オーストラリア東南部
へ海獣調査に出かけたとき、奇妙な
光景を見た。およそ人の気配のない
僻地の海岸に、突然、鉄のやぐらが
現われ、海辺に小山のような木材の
細片が盛りあげられていたのだ。近



「世界から」第9号より

てきたのは日本人で、その会社は日本とオーストラリアとの合弁会社だったのだ。話をきくと、そこで切られる木材は全部製紙用で、細片化されたチップは、ほとんど日本へ運ばれているということだった。

ふたたび海岸へ出たわたしは、さらに異様な光景を見た。明らかに遊覧船と思われる船が、チップの山のそばを通り、海上へのびたチップ積込み用の鉄やぐらの間をぬつて、ゆつくり走っていたのだ。

あくる日、わたしはその遊覧船に乗ってみたが、思ったとおり、その船はチップ積出場を遊覧コースにくみこんでおり、船内放送は得意気な何トシのチップが日本へ積みだされているということを放送していた。むろんその放送には、「こんなことで

は、オーストラリアの自然は守れま
せん」というような言葉はなかった。
自国の自然が破壊されているだけ
も問題であるはずなのに、それを賞
賛に似た放送をそえて観光客に見せ
る神経は、わたしには理解しがたい
ものに思われた。

たまたまオーストラリアで見た日本企業による森林破壊——しかも、自分たちが使う紙のために他国の森を裸にしているという現実、紙の問題の奥にかくされている新たな局面を見るような気がした。なにしろ日本企業は、海外進出という言葉が好きだし、海外のどこかにうま味があると聞くと、すぐにどつとくりだしていくからだ。

“紙”から生活を見つめ直して

わたしはオーストラリアで見たのは大昭和製紙だったが、この会社が現地へ進出したのは一九六七年である。同年、マレーシアにも進出している。また興人も同年マレーシアへ手をのばし、三菱製紙と本州製紙もカナダへ原料確保の活路を求めている。翌一九六八年には、十条製紙と住友林業がカナダへ、山陽国策パルプがインドネシアへ、六九年には王子製紙がガボンとインドネシアへ、七〇年には東海パルプがニュージーランドへ、興人、十条製紙、山陽国策パルプなどがマレーシアへ、大昭

和製紙が丸紅とともにカナダへ、七一年に本州製紙がニューギニアへ、七三年には日伯パルプがブラジルへと、あいついで海外に製紙原料を求める活動を開始した。

一九六〇年代に、国内の広葉樹資源も限度にきたことを知った製紙会社は、自然保護の高まりとともに、
「うるさくない」海外の各地へ木を求めて出かけていった。東南アジアには、広大なジャングルがある。熱帯性雨林の樹種は製紙用として問題があったが、ほかに原料がないとなればしかたがない。

わたしたちは一枚の紙を見て、そこに世界の森が濃縮されているという実感を持つことはまずない。まして紙が、かつて一度は、わたしたちと同じように、この地上に命を受けて生を享受したという生物の“死骸”を圧縮し、押しつぶしたものだという実感は得にくい。

紙を作るために、海外にまで食指をのばした企業の行為は、もとをたどれば、わたしたち紙を使う一人一人の行為の延長線上にある。つまりオーストラリアで製紙業の森林伐採に危機感を覚えたわたしは、わたしの生き方にこそ危機感を覚えるべきであり、海外の森をくいつぶしていく責任は、わたしを含む、すべての人々にある。（要約 鈴木はつ子）

エネルギー政策の転換を求めるたたかい

七尾集会で提起されたもの

ポットのスイッチを入れ、トースターにパンを、そしてテレビのモーニングショーを前にして食事をとる。コンセントが部屋には二カ所ずつ。私たちの生活に電気はついてまわっている。しかし電気が、一体どこで、どのようにしてつくられ、送られてくるのか、また誰が何のためにどれくらい使っているか、私たちは気にとめずに利用しているのではないだろうか。この無関心の中で、日本全国三十九カ所に危険きわまりない、

四の二日間、能登半島七尾に集まった「エネルギー政策の転換を求める住民運動全国集会」が火電反対の闘いをすすめてきた人々の呼びかけで、開かれたのである。この七尾という所は能登に原発、火電をつくらせない運動を十数年にわたって続けてきた歴史をもっている。ここに集まった一人一人は、ささやかだがしかし日本の国益として優先されている原発、火電建設にまっこうから地元で反対しつづけている、確信にみちた

四の二日間、能登半島七尾に集まつた。

人々だつた。

開発という美名の下ですすむ地域の新たな状況を各地の参加者が語った。第一次産業の振興こそが自分たちのめざす社会だと、町長をリコールし、原発誘致の賛否は住民の直接選挙で決定すると約束させた高知の窪川。有害物質をまきちらし、放射能放出をともなう石炭火力の増設に反対し、二人の町長をリコールしている愛知の渥美。漁業権にもついても、発電所が流す温排水公害から海

欠陥だらけの原子力発電所の建設がすすめられている。また大気汚染、環境破壊が石油の場合よりもずっと大きい石炭火力発電所が大規模に新設、増設されている。エネルギーの供給、拡大をすればするほど、そこで農業・漁業に従事し、暮らしている人々の生活を奪い、生命を買いたく結果をもたらしているのだ。

開発という名ですすむ地域破壊

こうした状況をもたらすエネルギー政策に反対して、二十二都道府県から二百人を越える人々が十月三、



集会で七尾アピールを採択した

の運動は、電力会社、自治体、政府が一体となり、埋め立て建設強行のために海上からは保安庁が、陸では県警、機動隊、右翼をも相手にまわ

このようなかで反対し続けることは、孤立をせまられ、生活そのものをかけた人々によってになわれている。私は各地の参加者たちが、直面している困難な状況を聞きながら、危険な建設物を地方に押しつけ、その被害を立場の弱い人間にかぶせてゆく企業と政府のやり方を都市に住んでいるからとみすごしてゆくことは許されないと改めて感じた。

原発を必要としない社会のために

原発を必要とする社会からいらない社会へ転換するために私たち一人

一人が生き方の選択をする必要が求められている。「エネルギー危機」のキャンペーンが、自治体におろされ、各地で省エネ運動が競われているが、危機感のみあおることが意図されている。それは電気製品の買い替えや電気消費の伸び悩みを、これ以上増やすものでないよう配慮されている。エネルギーを必要としているのは本当は私たちなんかない。企業にとって、過剰生産をささえ続けるために潤沢なエネルギーと消費の拡大をどうしてもつくり出さなければならぬのだ。また原発の技術は軍事的目的と同時に、後発国に対するエネルギー支配の手段ともなり得る。そうした目的のために地元の反対や不安を抹殺し建設を強行しようとする対応は、国の政策そのものが破綻していることを表わしている。

企業のエゴと行政の矛盾をみせつけられて、地元の人々は大きくかわっている。窪川では自民党員だった人が脱党し、反対運動の中心に立っている。「自分たちが住んでいる所に原発ができればよい」というのではない。日本中の、いや廃棄物を韓国や南太平洋の国々へ持ってゆくことをさせず、世界中の原発に反対しなければならぬんだとわかりました。そうすることが、人類

の未来へつながる唯一の道なのだから」とその人は牧畜で日焼けした顔を紅潮させて語った。反原発、反火電の闘いは開発のあり方や、豊かさの規準を私たちに問い直すことをせまっている。

政府の推進するエネルギー政策を、

私たちの生活を問いなおすための参考資料紹介

- 「反人口抑制の論議」 マフモード・マンダニ著 自主講座人口論グループ訳 風濤社
- 「新マルサス主義を撃て」 奥田孝晴著 風濤社
- 「誰のために子どもを産むか」 青木やよひ編 風濤社
- 「人口」 No.15 No.6 自主講座人口論グループ
- 「生命系の危機」 綿貫礼子著 アンウェイエル
- 「死の夏」 ジョン・G・フラー著 野間宏監訳 アンウェイエル
- 「沈黙の春」 レーチェル・カーソン著 青樹繁一訳 新潮文庫
- 「なぜ世界の半分が飢えるのか」 スーザン・ジョージ著 朝日新聞社
- 「食糧帝国主義と第三世界」 スーザン・ジョージ著 伊東ふみ子訳 小南祐一郎・谷口真理子訳
- 「飢えの構造」 西川潤著 「世界から」 No.8 アジア太平洋資料センター
- 「フィリピンにおけるバナプランテーション」 「世界から」 No.1 アジア太平洋資料センター
- 「フィリピンバナナと私たち」 アジア太平洋連絡会議編
- 「パプア・ニューギニアの本州製紙」 ロバート・ジェームス著 加地永都子訳 アジア太平洋資料センター
- 「もし紙がなくなったら」 藤原英司著 サイマル出版社
- 「不良化粧品一覽」 資生堂より反論せよ 平沢正夫著 三一新書
- 「あぶない化粧品」 日本消費者連盟著 三一新書
- 「統一あぶない化粧品」 日本消費者連盟著 三一新書
- 「東南アジアの漁業経済構造」 岩切成郎著 三一新書
- 「味の素を診断する」 郡司篤孝著 ビジネス社
- 「食糧と農業を考える」 大島清著 岩波新書
- 「穀物メジャー」 石川博友著 岩波新書
- 「経済協力の実状と問題点」 通商産業省発行
- 「世界食糧デーに向けて」 上智大学発行
- 「石油と原子力に未来はあるか」 槌田敦著 亜紀書房

●あこら25号 女と情報

目かくしされたまま戦争に突入した女たち。
同じことが今、起っていないか。
A5・予380頁 1500円

- 主な内容
- 情報って何だろう 住井 すす
 - 女と戦争と情報 加納実紀代
 - 女のつくられ方をめぐって 駒尺 喜美
 - ファシズムと情報 中村 智子
 - 知る権利と守る権利 清水 英夫
 - 南北問題としての情報 斎藤 千代
 - 国民総背番号制と女 吉武 輝子
 - 一つのフィリピン体験 天野 正子
 - (資料) 世界各国の情報公開法/IL0 家庭責任を持つ男女労働者の機会均等と平等に関する条約 他

●あこら24号 女と戦争

なぜあのおろかしい戦争を……。女は加害者ではなかったのか……。事実をひとつひとつ拾い上げ、考えてみました。 A5・372頁 1500円

●主な内容

- 太平洋戦争と私 もろさわようこ
- いま、日本で何が起っているのか 土井たか子
- アジアに戦争の跡をたずねて 松井やより

現在も地球には八億以上の飢えた人々がいる。

それに対して、「北」の国の人間は、今、「豊かな」生活を享受している。

たまたま、北に生まれたというだけの理由で、七十、八十才まで生きられ、教育も十分に受けられる。食生活もぜいたくになり、肥満を気にやんでさえる。

なぜ、これほどまでに南と北の格差は広がったのか。

一九五〇年代に始まる緑の革命、一九六〇年代、七〇年代の二回にわたる「国連開発の十年」と、南の国の工業化や農業の近代化が世界的規模でとりくまれた。しかし、その結果は、いずれも、かえって南北の格差の増大、南の国の飢餓と貧困の深刻化をもたらすというみじめな失敗に終わった。一九七〇年の一人あたり平均国民所得を絶対額で見ると、西側の三四三ドルに対して、開発途上国は、二二八ドルである。なかでも、農村の貧しさはいっそうひどい。農民の所得の向上、食糧増産のための農業の近代化、さらには国全体の経済の底上げをすべく行なわれたはずの南の工業化とはいったい何であったのだろうか。

私が、七四年にマレーシアに行ったとき、西海岸では、国連等の援助をうけて大々的に近代農業を発達

させるための政策が進められていた。大規模な灌漑や土地改良が行われ、トラクター・耕運機が入れられている。しかし、マレーシアの土地の条件のもとでは、灌漑は容易でない。木を切り倒しただけの田んぼは、灌漑の基礎的条件である土地のレベルングさえ、困難をさわるからだ。それでも、農業の機械化、近代化は進められ、あいつぐ品種改良とともに農業や化学肥料の大量投入、大型農業機械の導入が行なわれてきた。

これは、マレーシア固有の問題で

なぜ世界の半分は飢えるのか

川田 侃

その結果、全体としての農業生産は上り、一部の富農は現金を手に入れ、その生活は向上した。静かなはずの農村で、農民がホングのオートバイを乗り回して自分の畑に行くという。また、日本の農村における三ちゃん農業の問題は、今やマレーシアの農村における現状であり富農の娘や息子は、マレーシアを指して、マレーシアで一番いい高校に入れること、このような農業の機械化、近代化

は多額な現金支出を要する。また、それは、従来の労働集約型の農業を排除しながら進行する。このため、マレーシアでは、今までカバレオという水牛で土地を耕して生活をたてていた貧農は農業ができなくなり、農村をはなれてクアラルンプールに集まって行く。しかしそこでも職はなく、離農者は都市のスラムに入るしかない。したがって、農民の離農と都市のスラム化は平行して進む。

これは、マレーシア固有の問題で

あり、さらにそのスラム街人口の年増率は、一二・二〇％にも達すると推定されている。

このような状況は、世界銀行の總裁であったマクナマラをして、南の国には、子孫を残すという種の保存の可能性さえ信じられないほど悪化した状況「絶対的貧困」の中に八億以上の民衆が存在する。これを放置すれば全世界は居ながらにして難民化する、と恐怖させた。

ところで南の国は、広がる南北の格差に黙っていたわけではない。戦後、野火のように広がったその民族の独立以来、彼らの政治的覚醒はめざましく、次第にUNCTAD等の国際機関で結束してその発言力を強めていった。七十七カ国グループは、彼らの結束を示すものとして知られている。そして、ついに、一九七四年の第一回国連資源特別総会で、「新国際経済秩序(NIEO)」に関する宣言」を行うにいたった。

資源主権の原則を柱としたこの宣言は、開発途上国の保有する天然資源は経済発展のための貴重な資産であり、自国の経済発展のために長期にわたって計画的に利用されるべきであること。そして、実質的に開発・生産・流通の全過程を握っている巨大多国籍企業から、その支配権を奪い返し、生産や価格を資源保有国

が決定すべきである、と主張する。彼らは言う。北の少数の工業国によって決められていた古いシステムはくずれた。北の国々は古い認識を改めて、自立と平等を理念とする新しい秩序を立てる方向に積極的に向かうべきであると。そして、とくに彼らが強調するのは、新しい秩序樹立のためのそのプロセスに彼らを増加させることである。これは、世界経済運営に関する体制の根本的変革をせまるものであり、北の大国に対する南の国の抬頭を鮮明に印象付けた画期的な動きであった。

しかし、彼らの動きは、いわばエリートたちのものであり、国際舞台ではなばなしの活躍にもかかわらず、国内の改革については、古い社会体制の根幹をなす大土地所有形態は根強くのこり、農村は開発から取り残され、農民は相変わらず飢えてい。彼らエリートは、北に対しては強く要求するが、国内の改革には消極的だとさ批判される。このような現実を前にして、スンケルは、現在の世界を、もてる国ともたざる国ではなく、もてる者ともたざる者の抑圧体系として見ている。従属学派のフランクなどは、発展途上国の経済が、先進国の経済に従属すればするほど（たとえば、外資導入などによる工業化を進めれば進めるは

ど）発展途上国の低開発状態が進み、農業などの国内の取り残された部分はますます貧困にあぐらと民衆の貧困を説明した。

本

なぜ世界の半分が飢えるのか―食糧危機の構造
スーザン・ジョージ著 朝日新聞社刊

お腹が異常に膨張し、顔は年寄りのようにシワだらけ、枯木のように細い手足、こんな「南」の国の飢えた子供の写真を見るたびに、なぜ、彼らが飢えているのか、誰もが素朴な疑問を抱くだろう。

食べるものは何一つ不自由しなくなった私たちの暮らしと、飢えた南の国の子供たちと一体どのような関係があるのか、その構造の解明はむずかしい。そこでせいで、「スプーン一杯の幸せ」キャンペーンに、集った一円玉や五円玉をかきあつめて寄付することでお茶を濁してしまふ。かわいそうな飢えた子供たちに同情しながら、パンと牛乳とハムエッグの朝食をとる。

スーザン・ジョージは、南の国の貧しい人々が飢えるのは、世界の食糧生産が不足しているからではないと断言する。生産の不足ではなく、分配の不平等こそ大きな問題なのである。



(内海)

より、むしろ先進国の民衆に共感を持って迎えられるとさいえる。チリ、ニカラグア、グアテマラ……。西欧的な近代化とは違った、「もう一つの発展」、真の「民族の独立」を勝ちとるべく、思想のかたちで、あるいは武器をとるかたちでも、運動が起っている。

私たちが何げなく口にしている肉、その肉の生産のために、一体どれだけの穀物が消費されているのか。アジアの人口爆発がとりざたされているが、アジアやアフリカの人間が、〇〇人生きる以上のエネルギーをアメリカ人一人消費する。人間の生存の基本である食糧を一手に押える穀物大商社の実態。S・ジョージはこれらの記述を通して、世界の飢えの構造をわかりやすく説明。そして、「あなたに何ができるか」と問いかける。すきやきやステーキを食べるお金があれば、さんまの開きで我慢して、一九〇〇円を出してこの本を買うことを勧めたい。私たちの生活の構造が見えてくる書である。

人民の沈黙

わたしの中国記
松井より

周・毛の死に始まる激動の時代、北京で生活した行動派女性ジャーナリストの体験的中国論。革命30年、民衆に沈黙を強いる体制を問ひ、民主と人権を求めて闘う中国人との連帯を訴える。独自の鋭い観察と温かい感性がいま初めて伝える中国の実像。 四六判上製/382頁 1,800円

すずさわ書店・東京都新宿区矢来町56 振替東京3-138354

あるべきイスラム教の原理を崩して墮落しているうえに、西洋の帝国主義による近代化が重なって、我々は二重の抑圧に苦しんでいる。というリーダーたちの唱導に民衆が呼応して起こったものであると言われる。そしてこのようなイランの波はパキスタンからインド、南アジアに及び、インド洋からアメリカ、あるいはソ連の権力は追い出されると予想されるほどの勢いである。いままでは世界的にも疎外され孤立させられていたかに見えた、第三世界の草の根の動きが活発化している。

このように、第三世界の草の根の民衆の動きはますますスピード感を増し、今や彼らの動きが将来の世界のありようを決定するのではないかという予感さえ出てきている。

(まとめ 佐々木智子)

一九八一年八月、私は水俣にある財団法人・水俣病センター相思社が行なっている「実践学校第五回」に参加した。相思社は水俣病激発地帯の水俣市出月の山の上に、八年前、「水俣に終わりなき戦いと生活の基軸を」「水俣にもうひとつの世を」という呼びかけで設立された。

水俣病が公的に認識されたのが一九五六年五月一日、そこから今年は二十五年目にあたる。一九八〇年の十一月現在、チッソ水俣工場からの水銀廃液による水俣病は、熊本・鹿児島県で、認定患者一七五五人、棄却された者二千六百四十人、未処分申請者五千六百六十人である。しかし、認定された患者にしても、認定されない患者にしても、あるいは申請しようとしていない患者にしても、人々の苦難はなくなることはない。そして死んでゆく。「水俣は原爆と同じだ」という言葉が水俣を訪ねた私の想いと重なる。

チッソの悪業は続く

水俣の海は青く澄んでいる。しかし、チッソによって流された水銀はそのままである。水俣湾の汚染の激しいといわれるところには漁獲禁止区域として海上に網がはってある。漁業で生活をしている人々は、今日も禁止区域と指定されているところの数十メートルのところで魚をとり

水俣は



有機農法で栽培しているみかん
—芥川に写真集より—

いま
手塚洋子

つつ暮らしている。チッソは水俣湾の水銀ヘドロの処理として、水俣湾の埋め立てを強行した。そのための莫大な資金は県や銀行から借りている。埋め立てた土地はチッソのものとなり工場誘致をねらっている。しかし、埋め立て作業のため海底の水銀ヘドロがきまわされ、かえって海の汚染度が高くなってしまうという。

また、チッソは利潤の投資を千葉に移し、水俣におけるチッソの事業縮小を行ない、それに伴う雇用縮小のため労働の場がなくなり、体の丈夫な者は都会へ働きに出ていき、水俣の地に残るのは老人や病気の重い人という状況も生まれている。

さらに、チッソばかりか国や県市の無責任さも許せないものである。水俣病患者の認定は一九七七年を前後して「水俣病認定拒否」、すなわち認定棄却患者の急激な増大という状況

がある。これ以上認定するとチッソも県も国もつぶれてしまうような雰囲気をつくり、水俣は終わったとして責任のなすり合いをしている。

患者を食いのものにする医療 たかだか人口三万程の水俣には病院がひしめきあっている。外来にはビタミン剤液をつめ込んだ注射器が山のように積み、病院にきた患者さんに次々と打たれてゆく。帰りには一週間分の薬の入った大きな袋を

の乱獲であり、私たちの生活そのものでもある。かつて、水俣湾の水銀ヘドロ処理に困ったチッソはその廃棄物を韓国に輸出しようとしたが、チッソ労組や水俣の人々の闘いによりできなかった。

水俣には、チッソ剤を使用しない無農薬甘夏みかんを栽培している患者さんのグループがある。水銀で蝕まれた多くの人が漁業から転業したり、あるいは漁業のかたわら甘夏みかんを作っている。相思社の人々と患者さんたちは農協との関係を問い直し、農薬の勉強をしながら、無農薬の甘夏みかんの生産に励んでいる。

「水俣病」という共有感覚をつくるということは自分自身の生き方の問題ともかわつてくる。それは、高度経済成長のもと進み続けている「チッソ型社会」をこえたものを私たちがつくり出していかねばならない。そして、アアジアにおける民衆の連帯とも深くかわつてくる。

豊かさの中に埋没している生活―衣・食・文化など様々な物―そういった自分の生活の場を問い直し、日常の場をどう変えていけるのかということ、女の状況をどう変えていけるのかということ、私にとつて、「水俣病」との共有感覚をそんな闘いの中から探り出していかうと思っている。

韓国の政治犯の妻たちを訪ねて

激励の手紙を、カンパを！

「光州を忘れないで」「政治犯釈放の世論を起して」——この夏、初めて訪れた韓国で会った政治犯の妻たちの悲痛な叫びが、私の心底に残り、一人一人の顔が浮かびあがる。沈黙を強いられ、生活苦に喘ぎながらも、決して絶望することなく、けなげに生きている彼女たち。その姿に打たれ、私たちにできることは何かと自問する。結局、彼女たちを忘れていないということを示して励ますことだと思ふ。見ず知らずの日本人である私が訪ねて行ったとき、私たちが憶えて下さったのですね」と喜んでくれたことを思うと、一人でも多くの女性たちに訴えたいくなるのだ。「カードでも手紙でも送って下さい」と。そして「カンパを集めましょう」と。韓国でも、日本でも、みんなが忘れていない今こそ、私たち「アジアの女たちの会」は忘れてはならないのだ。ソウルと光州で出会った政治犯の妻たちの横顔と近況は——。

ソウルで

〔金大中夫人 李姫鎬さん〕

処刑寸前まで行って、「金大中を殺すな」の国際世論で辛くも生き延びて獄中にある夫の身を案じ、「淋しいので」週二回清州刑務所へ通い、毎日ハガキを出すという。ただし、面会は月一回十分間、しかも、鉄格子



金大中夫人李姫鎬さん

の窓越しにインタフオンで。昨年五月、光州事件直前の夫の逮捕以来、自宅に軟禁されていたが、今年五月からやっと外出を許されるようになった。ただし、KCIAの監視の下にあり、他の政治犯家族との連絡も許されない深い孤独の中で、キリスト者としての信仰と、夫の思想信条への共感を支えに生きている。

「最近日本では韓国政治犯への関心はすっかり薄れたと聞きますが、もう一度世論を起してほしい。毎月一回全政治犯家族のための祈禱会を開くとか」——心労のあまり太れないのか、ほっそりとした体つきが、

発言のはしに、ゆるがぬ闘志を感じさせる。

〔文益煥牧師夫人 朴容吉さん〕

民主化にほど遠い祖国の現状を憂えて、八月から九月にかけて獄中ハンストをした夫は思想性の高さと信仰の深さで尊敬を集めている民主化運動のリーダー。内乱陰謀罪で懲役十年で公州の刑務所にいるが、三度目の入獄。朴容吉さんは陽気な笑顔をたたえて、くまの風ふうのハルモニ（おばあさん）で、政治犯家族の中心的存在だ。

全斗煥政権になって、政治犯家族が集まることも禁じられている厳しい弾圧の下で、KCIAの尾行をまいては他の政治犯家族を励まし、面倒を見ている。軍法会議の傍聴席で果敢に抗議をし、何度も法廷外に引きずり出されたというが、夫が命がけで闘っている「民主化と民族統一」のために



李文永夫人金惜中さん(左) 芮浩春夫人黄淑愛さん(中央) 文益煥夫人朴容吉さん(右)

何ものをも恐れぬ不屈の闘いを、彼女自身、日々実践しているのだ。闘士とは思えないやさしく暖い笑顔が忘れられない。

〔李文永元高麗大教授夫人 金惜中さん〕

民衆の側に立つ学問で学生たちの信頼を受けていた夫は、内乱陰謀罪で十五年の刑を受け、朝鮮半島南端の金海の刑務所に囚われている。たった十分間しか許されない面会のために八時間もかかってたどり着く。

「夫はやせ細って、人相も変わりました」と悲しむ。日本で勉強したところのある金惜中さんは、大学生高校生の三人の子を持つオモニ（母）だが、小柄で愛くるしい女性。朴容吉さんといつも行動を共にし、政治犯家族のためにとび回っている。「マスコミは、連日、アカだ、反逆者だと騒ぎ立てていました。子どもたちは、父親を正義のために闘っているのだと誇りに思っています」といふ。

〔芮浩春元国会議員夫人 黄淑愛さん〕

金大中氏と同じ全羅道出身の夫は特別むごたらしい拷問を受け、その後遺症のため、めまい耳鳴りに苦しんでいる。八年の刑で原州の

刑務所にいる夫は、本の差し入れを一番望んでいるが、人権とか自由とか解放といった本は一切許可されず、経済の本など差し入れている。どの政治犯とも同じに、筆記用具の差し入れが禁じられていることがつらいという。四人の子どものオモニ。

光州で

〔洪南淳弁護士夫人〕

光州で人望のある夫は光州事件で市民側代表として事態収拾にあたっていたが捕えられて、六十八歳の高齢にもかかわらず裸にして水をかけたり、むごたらしい拷問を受けたが、彼女も九日間取り調べを受け、眠らせない拷問を受けた。「何よりつらかったのは、三男を私たち夫婦の前に連れてきてものすごい拷問にかけたときです。気が狂いそうになりました」と思わず顔をおおった。一番で無期懲役の宣告を受けたが、結局七年の



前列右から 曹亜羅女史、洪南淳弁護士夫人、明魯勤教授夫人 後列左、鄭東年氏夫人

刑で光州で服役している。「七十歳近いので、拷問のあとしばらくは歩けなかった体が、さらに弱っているの心配です」と案ずる。

〔鄭東年全南大復学生夫人 李明子さん〕

こんな残酷なことがあろうかと思うのは、金大中氏から五百万ウォンの資金をもらって光州事件の首謀者に仕立てられた三十八歳の鄭東年氏だ。あまりの苦しさ、壁に頭をぶつけて自殺をはかったほどのむごたらしい拷問にかけて、無理失罪罪状を認めさせられたのだ。あまりにもひどいでつちあげと、金大中氏が軍法会議で彼のことにふれたほどだが、一番では死刑の宣告を受けた。のちに無期に減刑されて、光州の監獄に囚われている。三度目の入獄。

「つらかったでしょう」と声をかけると、夫の苦しみと思うのか、涙をいっぱいためて、無言のままうつむき込んでしまった。二人の子どもをかかえて生活に追われているという。

〔明魯勤全南大教授夫人〕

洪弁護士と共に光州市民の信望の厚い学者で、鄭東年氏ら学生たちが重刑を科せられたことに苦しみ「私こそ首魁にしてほしい」と法廷で叫んだという夫。生木の丸太や鞭で殴られる拷問を受けたという。五人の子どもをかかえキリスト教病院で婦

女子労働者と共に

〔李小仙女史と娘の全順玉さん〕

焼身自殺した息子の全泰志の遺志をついで、ソウル平和市場の縫製工



李小仙さん(上) 娘の全順玉さん(下)



趙和順牧師 仁川の東一紡織の女子労働者

の果敢な闘争を支えたこの女性牧師は、今、仁川のスラム地区にある「労働者教会」を拠点に、地域活動に力を入れている。労働運動の弾圧がますますきびしくなり、東一の女性たちは、彼女の教会に来ることも許されない状況で、スラムの貧しい人々のために、保育所と診療所を開いている。設備もいたって貧弱で、スタッフもボランティアが中心だが、「少しでも、貧しい労働者のためになれば」と黙々と活動している(次頁へ)

場の女子労働者たちの労組を結成し、労働者のオモニ(母)と敬愛されるようになった李小仙さん。この一人の貧しい母親は何ものも恐れず、抑圧と闘い、この十年間何回となく投獄されたが、今年一月、息子の死の犠牲によって作られた清溪被服労組が強制的に解散させられたのに抗議してまた逮捕され、今もソウルの獄中にいる。母は意気軒こうで、二十人の雑居房の中で、他の女囚たちに、キリスト教の信仰を説いたりしていきま

私たちと戦争とアジア

— 八二年「女大学」にむけて — 五島 昌子

昨年六月の衆参ダブル選挙で、圧倒した政府自民党は、靖国神社参拝、教科書改悪、防衛力増強、ASEAN諸国へのテコ入れなど経済援助の名により、数の力にものをいわせて、戦争への道をひた走りに走り始めています。右傾化などという生やさしい言葉では捉えきれない加速度的な力でおしよせてきています。その力の前にたちふさがりたいたい思いを持った女たちのよびかけで、昨年十二月七日(日)「戦争への道を許さない女たちの集会」が東京渋谷の山手教会で開かれたことは機関誌10号でお知らせしました。それから一年の間、全国各地で実にさまざまななかたちで「女たちの集会」が開かれ、あらためて戦争責任の問題と、新たな侵略に対しての問いかけが始まっています。しかし、そうした私たちの思いを逆なでするニュースは後を断ちません。その中のひとつに、中国人を「生体実験、私もやった」毎日、10・16夕刊「自慢さえ」の見出しをつけて、日中戦争の最なか、細菌戦石井部隊の元軍医の発言です。生き延びる人間を「丸太」とよび、「動物

じゃゲメだった」と発症のさまを克明に記した著書を「成果」として示したと。それは戦争だったのだから当然である」と居直る側と、その居直りを許す風潮に背すじの寒くなる思いを抱いたのは私ひとりではあるまいと思います。

日中平和条約が78年に結ばれ、「中国への旅」が緩和されると待ってましたとばかりに旧満州(中国東北部)への懐メロ団が押しかけ、日の丸を打ち立て、住民感情を逆なでしたり、「戦友」や遺族の遺骨収集団と称してフィリピンやタイへ行き、帰りに買春観光をしてくる無神経さ、日本人のアジア認識の思いがりに怒りがこみあげてきます。

敗戦後三十六年、もうそろそろ「本当のこと」を云っても「何をしても」世論の袋だたきに合うこともないという彼らの論理と、それを許す風潮の中にこそ、私たちの責任が問われるのです。

アジアの国々は日本からの経済援助、技術援助なしにはやっていけないというおごり、買春観光の蔓延にみる退廃。しかし、アジアの国々か

らの資源の供給——略奪——なしには日本人のくらしは成り立たなくなっているという現状を考えることもなく、経済援助の名のもとに独裁政権を支えている日本がアジアの民衆の怨嗟の的であることに気づいていないのです。

また、国内での反動化の急先鋒である文部省は、教科書から丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」をはずすという。チツソ水俣のチツソという名前も。文部省の教科書検定課長は、抗議の声に対して、「原爆の図」の絵があまりにも悲惨である、「一企業の名前を宣伝することは教科書のもつ公平の原則に反する」と平然としています。悲惨でない戦争であるのだらうか。人間にあればどの苦しみをもたらししている企業名を忘れるというのだらうか。「公平の原則」とは誰に対しての公平なのか、はつきりしています。

日本に侵略された国々の民衆は、日本軍のしてきたことを決して忘れてはいません。そして、その苦しみの歴史をきちんと子どもたちに継承しています。たつた三十六年前のこ

以上、紹介した女性たちに、励ましの手紙やカードを送って頂きたい。孤立の中で生きる彼女たちにとって、それは励ましになると思う。相手の名前を明記して左記の住所へ英語か韓国語で、やむを得ない場合だけ日本語で。

(K・N)
大韓民国SEOUL特別市鐘路区
蓮池洞136-46
韓国基督教協議会人権委員会内

となのです。私たちの「会」は夏の合宿で、秋からの公開講座「女大学」で「戦争と私たちとアジア」というテーマで、さまざまな角度から日本の状況と、アジアとかかわり方を学ぶことにしました。特にアジアの国々で、日本の侵略戦争を子どもたちにどのように教えているか、各国の歴史、社会科学の教科書を集め調べるグループをつくりまします。日本の「防衛」とは何なのか、核の問題は、家族制度復活のかけ声とともに女たちを分断し、いかに体制に組み込もうとしているか、私たちのやらなければならぬことはたくさんあります。

女たちが結果して戦争への道、侵略への道に立ちふさがることができるとのか。これからのたたかいたいに向けて力を合わせましよう。

ひろば

英文の機関誌4号が届き、富山さんのインタビューの記事のところなど、大変興味深く読ませていただきました。

私たちは、来年「女と文化」というテーマで、機関誌を発行する計画でいます。皆さんの日本語の機関誌を使用するために、これから翻訳者を精力的に探すつもりです。他のアジアの女性に関しても、出来るだけ情報を集めたいのですが、太平洋の向こう側に居る女性は何をしているのかということ調べるのは、本当に大変な事なのです。これからは、私たちの機関誌と交換していきたいと思っています。

(米 R・フォーゲル)

私は名古屋で、労組の書記として働く一児の母です。先日、三八国際婦人デー愛知県集會にて、松井やよりさんのお話を聞き、「アジアと女性解放」を買って読みました。そして今、自分の女として母親としての生き方を問い直しています。自分の自立を求め、子どもの全面的な人格の発達を求める時、この生活がアジアをはじめ低開発国と呼ばれる国の人々を抑圧した上であり立っている事を知り、大きなショックを受けています。

すべての人が平等に、そして連帯して生きていくために、何の力もない私ですが、ぜひ「アジアの女たちの会」に入会させていただき、皆さんといっしょに学習し、活動できたいと思っています。

(名古屋 Y・O)

「前略」「アジアの女たちの会」を知り、早速入会したいとペンをとりました。土井議員が買春ツアーのことを国会でとり上げて下さっている時、何とか連絡をとりたいと思っていた内に、つい時期を失してしまいました。と言いますのは、企業で台湾、韓国ツアーと社員慰労という名目で、実績を上げた度に企画して連れていくのです。当然、夫婦間は気まずくなるし、お互いによくない思いで過ごさなければなりません。各家庭では妻たちが何らかの形で抵抗をしていた様ですが、宮仕えのサラリーマンですから、妻から会社へ抗議するなど、とても出来ずにおりました。

—— 中略 ——

一つ一つ知りたいと思うことをとりあげてくれた編集に頭が下がります。涙なくしては読めない韓国の問

題、私達は、ほんとうに恐しいことをしつづけている実感を持ちました。

—— 後略 ——

(沼津 S・K)

私たちは、マレーシア社会に関して批判的、進歩的な分析を行なっている有志の集まりです。

私たちの関心は大へん広く、女性の権利をはじめ他のいろいろな解放の問題に関することも含んでいます。もし、あなたの方のニュースレターなどを送って下さるなら、私たちの研究に非常に助けとなり、嬉しく思います。

(マレーシア H・レング)

活動報告

(1981年4月～9月)

- 4・15女大学 暮らしの中のアジア 第7回「第三世界を襲う粉ミルク禍」松井やより
- 4・28「光州を忘れない」集会「自由光州」上映会共催
- 5・2「女たちは戦争への道を許さない！」集会 (東京山手教会) 参加
- 5・20女大学 同第8回「アジアの味を変える味の素」塚本由美
- 5・23学習会 シスター広田を囲んで フィリピンの女性の闘いに学ぶ
- 6・7「安保をつぶせ！6月行動」6・7集会に参加
- 6・17女大学 同第9回「家族計画とピル——アジアでの日本の役割」飯島愛子 綿貫礼子
- 6・27学習会 アビト神父を囲んで「フィリピンは今」
- 7・15女大学 同第10回「日本の化粧品とアジアの女性たち」戸田杏子
- 8・15「女たちは戦争への道を許さない！」マラソン演説会 (東京渋谷ハチ公前広場) 参加
- 8・30夏合宿 テーマ「戦争と私たちとアジア」(伊豆天城山荘)
- 9・16女大学 戦争と私たちとアジア 第1回映画「侵略——語られなかった戦争」上映。森正孝氏

フィリピン新人民軍 従軍記

野村 進 著

新人民軍と寝食をともにした著者が、行軍の様子、ゲリラと住民の関係、新人民軍のイデオロギー、宗教との関係、戦闘の様子などを図と多くの写真をまじえて語る。単なる従軍記にとどまることのない新鮮な問題提起をふくんだルポルタージュ。 ¥1800

晩聲社

東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル
電話 03(255)0030 振替 東京 6-50696

'82年「女大学」例会

- 1月20日(水) レーガンの核戦略とアジア
近藤 和子氏(自主講座)
2月17日(水) 少国民の戦争体験(交渉中)
山中 恒氏(「ボクラ少国民」の著者)
3月17日(水) 再び「女は家に」
—家庭基盤充実政策を問う—
庄野 夏子氏ほか

場 所 渋谷勤労福祉会館
参 加 費 500円(会員300円)

機関誌「アジアと女性解放」

- | | | |
|------|-----------------|-------|
| 第1号 | 韓国民主化闘争の女たち | 300円★ |
| 第2号 | 買春観光を許すな! | 300円★ |
| 第3号 | 日本企業は海外で何をしているか | 300円★ |
| 第4号 | アジアへの文化侵略 | 300円★ |
| 第5号 | いま戦争責任を考える | 300円★ |
| 第6号 | アジアの闘う女たち | 400円 |
| 第7号 | 女と国籍 | 300円★ |
| 第8号 | 続・買春観光を許すな! | 400円★ |
| 第9号 | 第三世界の女と私たち | 400円 |
| 第10号 | 光州一周年によせて | 400円 |

★印は残部がありません

送料は1部170円です。郵便振替か切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

- No.1 Asia and Women's Liberation
No.2 Japanese Economic Invasion
No.3 Prostitution Tourism
No.4 Asian Women in Struggle

Price: Inside Japan No.1-¥300,
No.2, No.3 -¥400

Address(for Order):
Asian Women's Association
Poste Restante Miyamasuzaka Post Office
Shibuya-ku, Tokyo, Japan

韓国政治犯家族を励ます 緊急カンパの訴え!

全土が銃剣によって支配されている韓国では、政治犯の家族は全く孤立させられ、ひどいインフレの中で生活にも困り、国際的にも忘れられたのではないかという不安の中で生きてしていると聞きました。たとえば、人民革命党事件で投獄されている政治犯の妻、安保馨さんは、1974年から夫の無実を訴えて東奔西走し、2人の子供をかかえて生活を支えてきましたが、警察の妨害でそれも妨げられ、無力感から精神障害に苦しみ、望みをつないでいた今年('81年)の8月15日「慰赦」でも夫が出獄できないとわかった、何も口にしない日が続きついに息をひきとったのでした。彼女が生きていくために、私たちにできることはなかったのでしょうか。

他の多くの政治犯の家族も同じような悲惨な状況に追い込まれています。その人たちの存在が決して忘れられてはいないこと、思いを寄せている人々がいることを何とか伝え、励ましたいと思います。

そのしるしとして、ここに緊急カンパを訴えます。下記にぜひ送金して下さい。

郵便振替 東京0-46143

アジアの女たちの会宛(韓国へのカンパと明記のこと)

あ・な・た・も会員になりませんか?

今回(No.11)は「暮しの中のアジア」と題した特集を組みました。私達の暮しのほとんどが、いかにアジアの国々の搾取と抑圧の上に成り立っているかを少しでも知ってもらいたいと思います。どうしたらよいのか、何かをしなければと考えている方、仲間として「会」に加わって下さい。尚、会員になりますと機関誌、ニュースレターが送付されます。

機関誌のご批判、ご感想をお寄せ下さい。

アジアの女たちの会

〒141 東京都品川区北品川5-8-15-1403 五島方

郵便振替 東京=0-46143

★連絡先が変りました。よろしく!

編集後記

初めて編集に参加しました。まだ怒りを共有出来ない女たちに語り伝えたい想いが、私をつき動かしています。語り合いませんか? (K・S)

アジアに対する日本人としての罪の意識から、色々な事を知りたいと思い、機関誌作りに参加しました。 (T・S)

私たちの生活総体をより多くの人と共に問い直していきたいと思います。 (K・O)

一つのことを共同で創ることの大変さを痛感しました。 (I)

新しい人が沢山参加しての機関誌作り。新しい波を感じます。 (H・T)

アジアの人々の暮しの中に、抜きさしならぬ形で居すわっている「日本」と真向った二ヵ月でした。 (Y)

機関誌での問題提起をこれからどう行動化して行くか。私はいま元氣です。 (Y・A)

自由光州

1980年5月 16%カラー・25分 幻燈社・火種プロ作品

映画

音楽・高橋悠治 朗読・伊藤惣一
絵・富山妙子 監督・前田勝弘

プリントの販売・貸出しを行なっています

販売価格 200,000円 貸出し料金 10,000円

幻燈社 東京都新宿区西新宿8-19-1 ☎03(365)1927 〒160
火種プロ 東京都世田谷区桜丘4-16-2 ☎03(425)6095 〒156